

1人登山の愉しみ

～30代女性の登山8年間の体験記



mie0358

私は 30代で1人登山を始めて8年間続けて、その後山に住みたいとまで思うようになり、郊外の標高1000m位の山の中腹、標高500m辺りに移住しました。これは移住するまでの神奈川県丹沢地域の登山をしていた時の話と、移住してからの「イノシシは人を襲わない」を1つ加えた、すべて自分の体験を書きました。

初めは大山[1250m]でしたが、そのうち塔の岳[1490m]への登山が定番になり、大倉バス停から三の塔[1205m]までの登山道が素晴らしく、最も気に入っていました。コースは以下の通りで、この反対も時々歩きました。

大倉～三の塔～烏尾山[1136m]～新大日[1340m]～塔の岳[1490m]～大倉

女性1人登山で気を付けている事...

第1章 登山の愉しみ

冬の愉しみ

春・初夏の愉しみ

真夏の愉しみ

秋の愉しみ

出会いの愉しみ

第2章 野生動物との心ときめく出会い

林の中からリスが出てきて...

コガラガリュックに来た！

狭い道で雄鹿が通せんぼ

美しいウソのオスが近くの木に来て...

幸運の青い鳥・ルリビタキに会う

マムシに出会う！

アカゲラとの出会い

イノシシは人を襲わない ～自分の体験から

ミソサザイのお出迎え

第3章 印象的な会話

いつも紳士でいられる人

山小屋のお爺さんと同じ感性

みな対等な存在

迷惑！と思ったことを相手に伝えてみた

第4章 山に関する嬉しかったこと

心が洗われたその一言

空手の有段者と"気"の話をした

同年代の女性と会う

同じ登山用時計をしているフィンランド人青年

男子高校生の幸せな話

第5章 困った人たち

仲間...？

標高1000m以上の危機意識の違い

後をつけてくる男

後をつけてくる男 -No2

「アンタの事いつも見てんだよ！」突然言った知らない男

山中での怖い体験

第6章 山での珍事件

茂み男

登山道わきで大をしている男に遭遇！その後...!!

第7章 怖い体験

標高高い場所で休息に座った岩は...？

猛スピードで突然目の前に現れた物体

銃を構える3人の男に遭遇

激しい雷雨に追いかけて

地上1,5mの目の前を人の足が横切っていく

第8章 外国人との出会い

日本語に驚いたスコットランド人夫妻

陽気なイタリア人青年

珍しいガイド本を持ったアメリカ人青年

フィンランドの森で・私が外国人

あとがき

女性1人登山で気を付けていること

山の上のほうは人間が作り上げている社会とは違います。何かあっても警察・救急車などすぐ助けに来ることはできず、自分の体力と研ぎ澄まされた精神と警戒心が頼りです。厳しいようですがこれは何も特別なものではなく、野生の生物たちは産まれてから死ぬまで、警戒心を研ぎ澄ましながら生きています。

私は大人になってからある日突然1人登山を始めたのではありません。父が若い時から登山好きで行っていたので、子供の頃から家族で登山をしました。夏には父と父の登山仲間と山小屋に宿泊・自炊して山を歩きました。

その頃、自然の素晴らしさや、山のマナー・山での判断などを、父や父の登山仲間からしぜんに学んだと思います。

父は「10年間で家族で東海自然歩道（東京の高尾山麓～京都の箕面までの全長1350km）を歩く」という壮大な計画を立てて、毎年夏休みになると去年の続きから次の場所まで歩き、ついに計画通り10年間で家族で歩き通しました。そのことは地元の新聞にも記載され、良い思い出です。このように子供の頃から登山に親しんできました。

20代で母の看病と見送りの体験をした時、様々な神秘的な体験をしました。それを人と共有できないもどかしさを感じるのと、登山をすると神秘的な体験ができるのもあり、その頃また父と「関東ふれあいの道」を計画して歩き始めました。4泊5日程度を毎日5～7時間歩く旅は、自然の美しさや山の穏やかさに心洗われる思いでした。長く歩けば歩くほど心は軽くなっていき、生きる喜び一杯に満たされます。下山してしばらくすると、また山の豊かさが恋しくなります。父が忙しくて予定を空けられないので、（日帰りで1人で行ってみよう。）と、思いました。

私の遠縁の方が、大学生の時に雪山で遭難しています。子供の頃に1度会ったそうですが覚えていません。大学のサークルにいて何度も雪山を上手に登山していたそうですが、突然の雪崩が起きたそうです。その家に行くと、いつもその方の若い青年のままの写真がありました。両親や親せきの方々の話だと、とても思いやりのある気持ちの良い青年だったそうです。

...そうした事から、1人登山では自分の命を守る事を第一に考えています。人に迷惑が掛からないように、親しい人たちを悲しませないように、命を大事に決して

無理はしないで天候の変化ではすぐに引き返す、下山する。

...私は何度も引き返した経験があります。...

真の勇気とは危険を回避することであって、危険を承知でいく事ではありません。慣れてきても決して初心は忘れず、警戒心も解かない。山では気を付けすぎるくらいで丁度良いと思っています。

実際に歩く前一番に思い出したのは、家族で東海自然歩道を歩いた時に様々な県を通るのですが、登山道整備をキチンとしている県と、整備していなくて道が分からない、標識が崩れている、といった県がありました。

道なき道を背丈まで生い茂った藪を、両手で漕いで分けながらやっと歩いた、道の悪さで最も印象に残った場所がありました。その旅から帰って何週間もしないうちに、その場所で「1人登山の女子大生が殺害された」という衝撃的なニュースが流れました。女性は山好きで休みを取っては1人で様々な山へ出かけ登山を楽しみ、空手と合気道の有段者で戦えば男性でも軽く倒せる実力を持っていたそうです。犯人は捕まり、なんと老年になる体力的にはその女性より劣った男でした。争った形跡はなく、女性は偶然会った男と挨拶がてら話をし悪人でないと気を抜き、後を付けたのか再度会った時の出来事だったそうです。

前途輝く若い女性が、この間私たちが歩いたあの場所で...

あまりに衝撃的で痛ましく、恐ろしい事件でした。

この事件を基にし、1人で歩くについて決めたことがあります。

最も危険なのは人間（特に男性）で、警戒心を決して解かない。マナーとして挨拶はするが、それ以外話さないようにする。話しかけられた場合、こちらの情報は話さず、すぐ離れる。道や山の様子を聞かれた場合は答えるが、個人的な私への質問「どこから来たのか?」「どこに行くのか」にも答えない。（付けられないように）

同じ人と追い越したり追い越されたり、何度も会うことが無いようにする。追い越された場合、追い越さないように、相手から見えない場所で待つ。山に行く前や下山後のバス停でも、気を抜かず不必要に人と話さない。常に7割の力で歩き、危険を感じたら全力で歩いて振り切る。そのために力に余裕を持って歩く。服装は目立たないように地味なアースカラーでまとめ帽子を深くかぶり時にサングラスをしたり首にタオルを巻く。話しかけてくる人にもいろいろ会ったが、これで上手く振り切ってきた。

人間に関して低山ハイクは安全ではないと思う。手軽に行けるので犬の散歩や、かたまって酒・タバコの若者たち、昼間からお酒を飲んでいる酔っ払いなどがいて、「1

人〜？」などと話しかけてきた。

標高1000m以上で鎖場が幾つもあり、きつく長い登山道では気を抜くと自分が落ちてしまうので人は安易に来れないし、来てもせいぜい話しかけるくらいしかできない。私は標高1000m以上で標高差1000m以上を歩く。1日標高差1000m以上は健脚コースだが、気にはならない。

車が通る道路の近くの登山道も避ける。車には近寄らない。必ず誰かと歩いた登山道を歩き、初めての場所は1人では歩かない。万一迷った時のために、水や食料・服などは余分に持っていく。（冬はカイロ持参）

いろいろと警戒していますが、山の自然をいつも楽しむことができます。私がこれくらい警戒するのは登山時くらいですが、野生の動物・野鳥たちは産まれた時から一生これ以上の警戒をして生きていると思います。それでも出会った彼らは輝いて生きているように感じ、自然の中ではこれが普通のようなのです。

普段の過ごし方は、毎日7~8000歩ウォーキングし、時に両足に重り（アンクルウエイト＝片足500g）を付けます。ストレッチと深呼吸をして、体の柔らかさを保ちます。

それと悪い「気」を寄せ付けないような生活をします。良い事を考え良い事を行う。人から嫌なものを向けられても仕返ししない、できれば丁寧なものを返す。人には前向きな会話を心かける。相手の良いところを見つけて尊重する。

自然に対して畏敬の念・感謝の気持ちを持ち環境に良い生活に努める。ごみを出さない工夫や節水する生活、自然を汚さないよう気を付ける。

こうした普段の生活が登山の安全と関係がないとは思えないのです。自分の「気」をよく保つことは、様々な運気を上げてわが身を守ってくれていると思います。

入山時には「また来ました。今日もよろしくお願ひします。」と挨拶し、無事に下山したら、「今日も気分良く歩けました。ありがとうございました。」とお礼を言います。

。

第1章 登山の愉しみ

1人で登山して長く歩くと、普段心の中にある雑多なものがすっかり消えていき、代わりに自分が1人でここまで歩いた自信と満足感・自尊心で心が満たされていきます。普段向き合おうと思ってもなかなか向き合えない自分自身の深い部分を見つめる事ができるのも魅力です。同じ道を歩いても毎回自然は違った顔で迎えてくれ、その少しの変化にも気が付く事ができます。嬉しいことに鳥たちや野生動物たちが、1人で静かに歩いているほうが近くに寄ってきます。私はこの登山を「思索登山」と名付けています。

普段何か問題が起きると、周りにも自分にも最も良い解決方法は何か、ここから学ぶこと、得ることはあるのかと考えます。そこから何かを得られれば、それはただのストレスではなく意味深い事に自分で変えられるからです。それで実際に色々な気付きを得られますが、考えすぎてずっと同じことが心を占めてしまうこともありました。登山をすると自然の豊かなエネルギーに癒され、頭がスッキリしてきます。否定的な考えが姿を消し、肯定的・前向きな考えが頭を占めるようになってきます。生きていると様々なことがあり、言葉で表現できる事ばかりではありません。言葉にできない深い思いを持った時、山はすべての想いを包んでくれ、下山し麓が近くなる頃には、解決に導かれる道がいつの間にか浮かんできます。

自分に生まれたことや自分自身でいられる幸せに満たされ、自然や、普段周りにいる人たちへの感謝の気持ちで満たされていきます。

雄大な自然と一体となったような言葉で表現できないほどの至福で、人として産まれたら '自分自身に生まれた幸せ' に満たされる事は非常に素晴らしい感覚だと思います。私は何度それに助けられたか、1人登山をする手段があったから自分と向き合い、思索をする生活を続けることができたのだと思います。

現代社会の中で、それを感じることは難しいのかもしれませんが。ただ、自分自身でいられる事が幸せで満たされていく...もしも世界中の人たちがこの感覚を感じる事ができたら、戦いなど必要なくなるようにも思います。1度でも心の底からこの感覚を感じたら、1人登山を止められなくなり...8年間、その後山に移住しても続けました。

1人登山を始めた頃、叔母さんに厳しく言われたことがあります。

「若い女性が1人で山を歩くなんて何かあったらどうするの!!誰もいない山道でばったり男性に合うんでしょ?恐ろしいじゃない!誰かと行くかもっと楽なほかの趣味にしな

さい。お母さんが早く亡くなったからって好き勝手して、命を粗末にするのはやめなさい！」

...私は終わるのを待ちながら、心配してくれている事に感謝しながら、どう話そうか、と考えながら言葉にしていきました。

「母の看病で何よりも命を大切にしてきた私が、自分の命を粗末にするとお思いますか。自分の命を大事にするからこそ、1人で登山をするのです。自分自身でいられる幸せを感じられるからです。」と、話しました。

私が登山する道は日帰りでだいたい3万歩でした。舗装道路をそんなに歩けません。土の道は足に優しく、落ち葉の上はクッションのように気持ちが良いのです。空気は澄んでいて深呼吸もたくさんできます。

登山はまさに「先憂後楽」厳しい道を歩けば後の喜びが何倍にもなって心に返ってきます。自分にしかわからないけど見えない部分の心が豊かになります。

冬の愉しみ

標高1000m以上で、ピンと張り詰めたような冷たい空気を清潔に感じ、雪が少し積もった道をサクサクと音を立てて歩くのが好きです。（雪山登山ではなく山頂の辺りがうっすらと積もったような状態）雪一面に太陽の光が当たりすべてが美しく輝いて見えると、その輝きに包まれてこの大自然の中にいることに深く感激し、白い雪に覆われると見慣れた景色が、どこか別の国のようで冬の不思議な美しさを感じます。雪に残った他の生命の足跡を見つけると（鹿・鳥）自分の足跡と見比べ、どちらも同じ時代を生きている命の証であり、自分もまたこの自然の中の一部であることを思い出します。その傍に自分も素足で足跡を付けたら、この鳥のように美しい足跡になるだろうか？ほかの生物が自然に沿って生きていることに思いをはせ、なるべくそのようにありたいと改めて思います。

空気が冷たすぎて顔や耳が痛くなることもあります。冬は登山者が少なく静かな山を堪能でき、思索的になれる。何時間歩いても誰にも会わないと、この世に1人であるような不思議な感覚になります。

私は野鳥が好きで登山中に野鳥に出会うと感激します。冬は落葉樹が葉を落とし、木立の間が良く見えて、カラ類（シジュウカラ・ヤマガラ・コガラなど）の群れやカケス・ゴジュウカラやコゲラ・アカゲラなどのキツツキ類を近くで見られるので、それも楽しみです。無彩色の木立の中にアオキなどの赤い実を見つ

けると、

「こんなに寒いのによく頑張っているね。鳥たちは来てくれた？」と話しかけ（この寒さの中頑張っている！）と嬉しくなります。

赤い実を冬の食料にする野鳥は、見つけると嬉しいのでしょうか…。

私は食べないけど、赤い実を見つければ元気が出てきます。

春・初夏の愉しみ

温かくなり風によって春の香りがしてきます。色々な花・葉・土の香りもして、陽だまりは冬の厳しさが姿を消して穏やかな雰囲気になり、同じ登山道が温かく迎えてくれているように感じられます。緑の木々の葉に太陽が当たって反射して白く輝いて見え、それを眺めていると自然の輝きに包まれているのを感じ、とても平和的な気分になります。少々花粉症気味なので強風の際は行かないようにしますが、穏やかな気持ちで登山できる春は、これからのシーズンに思いをはせると心躍る気分です。

同じ登山道の同じ場所で、毎年小さい薄紫色のタチスボスミレが花を付けます。春になって見つけると、友人に会えたようで嬉しくなります。

「こんにちは、また会えたね！冬の間ここでよく頑張っていたね。」花のある期間はいつも挨拶をします。

別の登山道にある桜の花の素晴らしさは毎年の楽しみですが、桜が咲いた時だけ人で混み合い、騒々しくお酒の臭いがして、

（桜の木はこのことをどう思っている…？ 1年間存在すら忘れられているのに、花の間だけたくさんの人々…）

花のある木や草は寒い冬の時期もそこでジツとしながら花を咲かせる春の準備をしています。誰も見ていなくても誰にも評価されなくても、自分のために黙々と準備をする。春になり花を咲かせることで存在が分かる。花が終わって人が去っても、また自分のために葉を出し成長をしていく。周りがどうあれ、自分の目的を黙々とこなしていく…。こうした彼らの生き方に惹かれ、自分もこうありたいと願っています。

新緑の頃は最も好きな季節です。新芽が鮮やかな黄緑で目に映え、新緑の葉の香りがやわらかく、これから成長しようとする生命力が自然全体にあふれます。自分自身も内面の成長ができるような気がしてくるのです。

太陽は強く照るようになりますが日陰はさわやかで、木漏れ日の下の登山道は爽やかな緑の香りがします。深呼吸すると体内の細胞が新しくなるような生き生きとした感覚が

体一杯溢れるようで、生きる喜びを感じこの世のこの場所に存在している事がただ嬉しく、ありがたい気持ちになります。

冷たい飲み物を持っていくのはこの頃からです。

鳥たちも春に巣を作り新緑の頃は卵からヒナが孵り餌探しに大忙しです。親鳥たちがさえずったり、お互いに呼び合ったり、野鳥の声も多く聞こえるようになってきます。ヒナが巣立つと小さくとも力強い声「チーチーチー!!」

と、あちこちで聞こえてきて、真っ直ぐに懸命に生きているその声は、心真っ直ぐに生きることの素晴らしさを賛歌しているように聞こえ、その場にいられる嬉しさをかみしめます。

真夏の愉しみ

真夏は30℃以上になることが多く、6時間歩いている間中汗が流れ続けます。水分は2L持参してもすべてなくなり、下山してから帰宅までさらに1L摂取します。ハードですが、下山時には体が軽くなって気分も清々しいのです。紫外線が非常に強くキラキラと照りつけるので歩くことをためらいますが、日焼け止めとUVカットサングラス・帽子をかぶり、強い日差しの中を歩くと、木々の日陰のありがたさを感じます。

山頂の木陰で昼食後仰向けになり、くつろぎながら風の音や鳥の声に耳を傾けていると、温かな大地と爽やかな大空に挟まれ、

(自然は平和で美しさに満ちている)と、改めて気が付きます。

真夏は1日が長いので、急がなくてもよいのも魅力です。

セミの鳴き声がうるさいくらいに聞こえて、真夏の暑さを倍増させますが、1年の中で真夏をたっぷり感じることは、1年の健康を保つためにも大切だと思います。

秋の愉しみ

厳しい暑さはやわらぎ、晴れた日は空が高く青く乾燥した気候になるので、爽やかに登山できるようになります。青空の白雲の形が最も美しくなるのもこの季節です。山脈に落ちる夕日が美しく輝き、夕日の美しい時期とも言えるでしょう。枯葉が落ちて溜まった道を歩くとカサコソと軽い音がして、耳にとても心地よく落ち葉の香りに包まれます。こうした道を歩くのが好きです。落ち葉の香りを深呼吸すると、秋を満喫している穏やかな気分になり、そして多くの落ち葉はクッションになって足への衝撃がやわらかく、いくら歩いても疲れません。日常生活で落ち葉はすぐに掃除しなければなりません。

んが、こうして落ち葉の上を歩けることは秋の素晴らしさ、自然の良さを身体で感じる
ことができます。

下を向いて登山道を登っていると落ちている様々な木の実が目に入り、見慣れた木
の実や不思議な形をしたものに立ち止まり、拾って眺め、さらに目の前の大木を見上げ

、
（手の中に入るこの小さな木の実から、こんな大木が生えるなんて...）と、自然の力強
さや神秘にしばし思いをめぐらせます。また、木の実のカラや、小さい葉が巻いて包ん
であるものが多く落ちていると、

（誰がこんなことをしているの？）と、不思議に思います。1つ取ってはいでみたら、
中に小さい虫が入っていました。すっかり感心し、

「こんにちは、小さいのにこれを作ったの？器用だね？」小虫に言ってまた包もうとし
たら、上手くいきませんでした。手先は器用なほうなのに、この小さな虫が巻いたよう
には巻けません。接着剤のようなものを出しながら巻いたようです。

「あなたの冬の家だったのにごめんね。器用だから自分でできるね？」そっと木の側に
置いておきました。こうした事で今まで知らなかった自然の神秘をまた1つ知っていき
ます。

秋は紅葉が美しくなるので、山全体の雰囲気が変わっていきます。
徐々に紅葉が濃くなっていく様は自然の色彩の美しさが毎回違うので、心が豊かになり
ます。この時期は新緑の頃と同じように歩き易いので、再び登山者が多い季節です。秋
の日はつるべ落とし、と言いますが前の週と同じ時間でもう薄暗く、季節の変わりを実
感し、ニュージーランドやオーストラリアの友人たちがこれから春や夏を迎えることに
思いをはせます。

出会いの愉しみ

普段会えない野生動物たちに会えるのは心躍る気持ちになります。
特に野鳥が好きなので近くに来てくれると（山に来て良かった…！）と思います。時
期により子鹿に会うこともあります。まだ人を疑わず近くに来てジッと見つめられると
、嬉しくて息を止めて、こちらも観察します。山頂に着いて富士山が見える時、それも
大きな喜びです。

山で出会う人たちは豊かな自然が好きで山に来るので、挨拶するだけでも気持ちの良
い方が多いと思います。元気な挨拶を自分からしてくれる方だと清々しい気分になり

ます。登山道は登り優先なので、こちらが下りでは避けるのがマナーですが、「どうぞ！」と先に通してくれる方がいると、その心遣いも嬉しいです。

「1人で歩いてすごいなあ！頑張ってる！」

「あと少しです、気を付けて。」などと声をかけて下さる方もいて、ハードなコースを1人で歩いている私を気遣ってくれている方々もいました。

同じように若い女性1人登山をしている方に会くと、

（この人も頑張っている。同志…）そんな気持ちになり、一瞬立ち止まりお互いに見つめて、ニッコリと挨拶します。女性1人だからこその緊張や苦勞、それでもここに来ていることに、心の中で称賛し合うような気持ちです。でも、同年代の1人登山の女性に会うことは珍しかったです。

中高齢女性登山者には時々会いました。普段の生活では見られない女性たちで、1人で自立心と自律心によって緊張感を保ち歩いてくる姿は、強く・美しく・頼もしく、年配の女性が輝いている姿に嬉しくなります。私も年をとっても、こうして歩く女性でありたいと願っています。

林の中からリスが出てきて…

1人登山最初の年だった。

初めて歩くのは以前父と歩いた丹沢大山[1250m]、比較的登り易い山を選んだ。大山は丹沢国立公園の中で最も観光化されていて登山者も多い。ケーブルもあり雨降神社だけに参拝に来る人もいる。ルートも色々あるが、最も長く歩けるように工夫してコースを選んでいった。

その登山道は比較的人が少なかったので落ち着いて歩くことができた。しばらくすると近くの木で何かの音がした。

立ち止まって音のほうを見ると、側の木に愛らしいリスがいてこちらを見つめている。

「こんにちは。山が好きで来ました。可愛いね。もっとこっちに来てごらん？」話しかけると、りすはじっと見つめながら少し近くに来てくれた。

つぶらな黒い瞳でなんとも可愛い。

「もっと近くにおいで。」声をかけると、4m位まで来たので心躍る気持ちだった。野生動物は凜とした美しさがある。目が輝いていて美しい。

(リスは私の言葉が分かるのかな...?それとも興味を持っているから偶然近くに来るのかな?) ずっとこちらを見ている…。

人が1人とリスが1匹。しばしの静寂の中、呼応する2つの生命。

私はいつもこういう時、自分と他の生命の命の存在が同じ...と感じる。そして私たち人間が作り上げている人間社会が、一種独特の世界に思えてしまう。人間が自然から切り離されていて、他の生物を意識することも恐れることもない世界。私たち人間の都合だけで自然を利用・破壊してしまうこともある。この自然は私たち人間だけのものではなく、すべての生き物のために存在している…。

...こうした思いは前にも体験している。

家庭菜園をしている時、耕している畑に小鳥が来て"すべての命への賛歌"でも歌うかのように近くでさえずってくれた時や、菜園の作物に来たカマキリがじっと思索的にいるので話しかけたら、私の目をずっと見ていた時…。

作物に水をあげるとその香りが強くなって全体が輝くので、植物たちがまるで生きることや生命全てを称賛しているように感じた時…。

...私はこの感覚を自分の中で特別に大切にしている。

リスと私はまだ見つめあっていた。

(他に何か話しかけたら分かる?)と、話そうとしたら...突然後ろから登山者の足音がしてリスは慌てて逃げてしまい、2度と見えなかった。

不思議な出会いだったが、野生動物にはきっと気持ちが伝わるのかも知れない、と思えた体験だった。そして私たちが知らないだけで、野生生物たちは人間をいつも観察しているのかも知れない...とも感じた。

コガラがリュックに来た…!

登山1年目の秋だった。

大山のいつものコースを歩いて最後の下りになる前にベンチがある。

ここに座ると午後の日差しが柔らかく、穏やかな気分になり、その日の登山の満足感を味わうことができる。そこで水分補給をしながら気分良く歩けた幸せに感謝の気持ちで心満たされていた時、突然シジュウカラの声が出た。メジロもコゲラの声もする。楽しそうに軽快な鳴き声を出しているカラ類の群れだった。10羽はいる感じ...私のすぐ後ろの木々に留まったり、また飛んだり群れがゆっくり移動していた。

そのうち1羽が私との距離3m位の地面に下りてきた。

驚いて見ていると、小さなコガラがあちこち見ながら、ちょんちょんちょんっと近くに寄ってきた。私の登山靴と私の目を見上げ、交互に不思議そうに見ている。こういう時は動かないほうがいい。相手を観察しよう。

「こんにちは、天気が良くて気持ちが良いね。山が好きで来ているの。あなたもここが好き?」コガラは不意に飛び上がり、私の座っているベンチの上に止まった。

「こんなに近くに来てくれて嬉しいね。ありがとう。」手で捕まえられる程近いコガラに言った。コガラはじっと私の目を見ていて、サッとリュックに飛び乗った。不思議そうにリュックの上を歩き私を見る。ドキドキしてきた。

(これほど近くに野鳥が来てくれるとは!!次に何が起きるのか1つの動きも見逃さないように息を止めて観察しよう...)

コガラはリュックの一番高い場所に来た。私の目から30cm位の場!白と黒の地味な色だが羽は美しく輝いていて光沢があった。

(凜とした美しくも可愛らしい目...!!こんな目をして日頃何を考えている...?)コガラと見つめあっていると、まるで時間が止まったように感じていた...

気が付くと上のカラ類の群れは声は聞こえても、もう離れてしまっているようだった

。

「仲間の所に帰らなくていいの？みんなもう行ってしまおうよ。」

じっと私を見つめていたコガラはサッと飛び去り、群れの中に帰っていった。

野鳥が興味を持って近くに来てくれるなんて不思議な体験だった。

自律心を持ったように凜として可愛らしかったコガラの目を忘れることはない…。

私も山に来ている時はそんな目になっているといいナ、と思った。

狭い道で雄鹿が通せんぼ

それは6年目の冬だった。

その冬は暖冬で積雪もほとんど無く、全コース6時間を真冬でも歩けた。

(いつもは冬になると積雪が多いのでコース中の三ノ塔[1205m]だけ登って下るだけになっている。大倉から往復4時間)

大倉から塔の岳[1491m]までの登りは、山小屋で宿泊してきた人たちが下りてきていたが、塔ノ岳から新大日[1340m]方面は誰も登山者に会わないし、遠くにも見えなかった。積雪は無くても、冬の1000m以上は凍り付くように寒く北風は強い。吹き飛ばされそうになりながら注意して歩いた。道幅がわずか1mしかない痩せ尾根では(両側は気の遠くなるような崖)手に汗握り、

(ここ落ちたら誰にも分からない。春まで探されることもないし、すぐ隣に死がある...) そう思うと身が引き締まる思いがした。歩きながら、

(なぜ自分はいつも厳しい事ばかり選択するのか...今日は少し厳しすぎるかも...) と思ったりした。でも、私は都会に行くのなら厳しい自然の中にいるほうが落ち着く。大自然の中たった1人になると、自分でも知らない内面の強さに出会えることも多い。

(どのように自分の時間を過ごすか選択するなら、やはり厳しくてもここに来るんだろうなあ。) そう思い、黙々と歩いた。もう少しで新大日[1340m]の広場に出る前は道幅が狭く、両側は1m位高い土が壁のようになっている。下を向いて歩いていて強い視線を感じて顔を上げると、5~6mほど前に巨大な雄鹿がおしりをこちらに向けて振り返り私を凝視していた！

"自分に危害を加えるのか?!それとも何もしないのか?" 警戒し、私の心の奥まで探るような強い視線だった。たじろいで立ち止まり私も雄鹿を凝視した。こんなに立派な角のある大きな雄鹿を初めて見た。"森の王者"の風格・迫力が漂い、この鹿に向かってこられたら無事ではいられない。幸運にも後ろ向きなので向かってくる事はないけど…。今迄何度も鹿に会っているが、雌鹿や子鹿だった。

(そういえば雄鹿はいつもどこにいたのか...?)

私も警戒したが、警戒の度合いは雄鹿のほうが強いようだった。
私はためらいながらも話しかけてみた。

「こんにちは。山が好きで歩いているだけ。ここはあなたの縄張りなの？邪魔したかな？知らなかったからごめんね。私はあなたに何もしないよ。ほら、何も持っていないよ。」狩人の銃を警戒しているのだと思い両手を広げて見せると、彼は私の右手にある登山用の杖をジロっと見た。

"それは何だ？"とでも言うように...

「これは杖なの。これがあると下りが楽だから、自分のために持っているだけ。こうやって使うだけだよ。」と、その場について説明した。

雄鹿はジッと凝視していたが警戒心は薄れたようで、そのうち目の雰囲気が変わってきた。私から目をそらし、「フンツ」と鼻で笑うように息を出し、しっぽを少し振って横を向いた。

(ひとまず安心...。)

私は山で他の生物に会った時(動物・鳥・木・植物)いつも話しかける。言葉は分からなくても"気"は伝わるもの...と信じているから。

雄鹿は振り返り、今度は興味深く私を見ている。多分彼の人生(鹿生?)の中で、こんなことは初めてなのかもしれない。

「あのさ、少し前に歩いてくれないかな？ここ歩いて先に行きたいの。」私は色々と話しかけた。雄鹿は時々しっぽを少し振り、"面白いやつだ"とでも言うように「フフンツ」と鼻息を軽く出して、私を見たり横を見たり...

しかし一向に前に歩こうとはしない。

厳しい寒さの中で、止まっていると凍えそうになる。冷たい北風で耳は切れるように痛く、手がかじかんできた。腕時計の温度計は-3℃だった。

鹿の横をすり抜けて先に行けるほど道は広くない。

「寒くなってきたから早く歩いて。お互い凍えたくないよね？分かるね？」

強引に2~3歩前に進んで鹿との距離を縮めると、彼は驚いて見ている。

そして少し考えて首の向きを前に変えて歩き始めたが、2~3歩で止まってしまった。また振り返り見ている...

引き返すことも考えたが、日没までに下山することは不可能だし、下るには鹿の少し先まで行かないと道はない。今は冬だから遅くなると暗くなって危険...どうしよう...？

「ほら、早く歩いて。これからまだ何時間も歩かないといけないんだから。ここで止まっていたら困るの。あなたはここで生活できて夜も眠れても、私は下山しないと死んでしまう。お互い住んでいる世界が違うんだから、お願いだから歩いて。すぐその先まで歩いてくればいいから！」繰り返し必死に訴えると、不思議な事に雄鹿は前を向き、調子よくテクテクと歩き始めた。

(良かった…。これで帰れる。) 広場に出た時、鹿の後ろから右手の道へサッと抜けた。そして追いかけてきて追突されたら困るので小走りに階段を下った…。

「ケーンッ！ケーンッ！」突然雄鹿の鳴き声が私の心に突き刺さったのは50m程階段を下った辺りだった。

ハツとして振り返ると、後ろで立派な雄鹿はジッと強く私を見ていた。寂しさと張り裂けるような声で、私に向かって「ケーンッ！」と鳴いている…。

信じられなかった…。何気ない遠吠えではなく、確かに私を見て心に向かって叫んでくる。標高1300m程の山々が連なる広大な景色の中で…周りを見ても生き物はどこにもいない…。まるで

「もう行くの？なぜ？」とでも言うように…。

でも私は早く帰らなければいけない。ここにいたら凍えて死んでしまう。

「帰らないといけないの！ごめんね！元気でね！」手を振ってまた階段を小走りに下り出した。

「ケーンンッ！ケーンンッ！」さらに強い叫び声が聞こえる…。

「鳴かないで！必ずまた来るからね！そしたらまた会えるよ！元気でね！」大きく手を振り山々に響くほどに叫んだ。

これは何…？

鳴かれると後ろ髪惹かれるようで、先に進めない気持になる…

(2度と鳴かないで…) 小走りに下った。

…鹿はもう鳴かなかった…

とても不思議な体験だった。鹿は人恋しい気持ちだったのか…？

寒くて下山時刻も気になり、鹿があまりに巨大なので少し怖くて早く離れたかった。強く見える野生の動物でも淋しい気持ちがあるのか…？

あのように表現されて戸惑った。

落ち着いて後から考えてみたら野生の鹿に認められるものを私が持っていたのかと思うと嬉しくなった。野生生物に認められることは私にとって大きな喜びとなる。またあの鹿に会ってみたいと思ったが、それ以来会うことは無かった。

美しいウソが近くの木に来て…

3年目の秋のことだった。

いつものように標高1000mの辺りを下っていた時「フィーツ、フィーツ」とウソの鳴き声が聞こえてきた。なんとも品の良い静かな鳴き声を、歩きながら楽しむ。私が遠慮したいのはカケスの声。「ギャー！ギャー！」と突然の騒々しい大声で驚かされる。しかも曇りで暗い時によく鳴くので心細さが募るから。

ウソの声は頻繁に聞けないので嬉しくなった。歩いているのにその声はちっとも遠くならないどころか徐々に大きくなっていく。不思議に思って振り返ると、ウソは枝から枝に移りながら私についてきているようだった。

(こんなことがある?) 勘違いかと思ったら、ウソは私の目の前2~3mの近さの木の小枝に止まった。そして自分が止まったことでまだ不安定に揺れている小枝の上で、小さな体で上手にバランスを取りながら軽やかに私を見つめた。遠くから人間を見つけて、好奇心で観察したくて見に来たような雰囲気だった。

「こんにちは。今日は天気が良くて気持ちが良いね。ここで暮らしているの?」不思議な事にウソが微笑んでいるように感じた。実際に鳥が微笑むなどありえないが、その時の私はそう感じた。

(なんて感じの良い鳥!) 思わずにっこりして

「側に来てくれてありがとう。」ついお礼の言葉が出た。側で見るオスのウソは大変美しく見とれてしまう…。

私がゆっくりと歩きだすと、ウソも枝を移りながら私を見る。軽やかで心地よい気分になってくる。

(こんな楽しい気分を体験させてくれるなんて...) 歩きながら歌でも歌いたくなる気分。少しでも長く一緒に歩きたかったが、10m程行った場所でウソは登山道から少し離れた枝に移った。

「ありがとう、また来るから元気でね!」ウソは次々と枝を移り林の中に消えていった。

目の前にウソがいなくなると、すべてが夢のように感じた…。

（私は野鳥が好きだから、人に興味を持っているように見えてしまったのかな？）普通野鳥は自ら人の近くには来ないし、人が来ると逃げてしまう。

（この軽やかで繊細な気持ちをずっと忘れないようにしたい…。）

そして野生生物の中には、他の生物に興味がある個体がいるのでは…？という以前からの思いを改めて感じた。

私はこうした野生生物との出会いを一つ一つ大切にしている。

幸運の青い鳥♪ルリビタキに会う

ルリビタキの雄は憧れの青い鳥だが、普段から登山で野鳥を観察しても、実際に見たのは8年間で2回しかない。

最初に会ったのは5年目の秋だった。

そこは標高1000mの辺りで下山中だった。突然左の茂みから登山道を野鳥が通り向けた。それは私の5m程先の棒の先に止まり、こちらを振り返った。

よく見ると、あのルリビタキ！ルリビタキがこっちを見ている！

産まれて初めて近くで見るルリビタキは、青い羽が美しく輝き脇のオレンジが目に映え自然の彩色の美しさに目を見張った。息をのんでもっとよく見ようと身を乗り出すと、ルリビタキは飛び、その飛ぶ美しさは青い風でも見るようで見とれてしまった。それは一瞬の夢のようで、

「確かに見た…そしてルリビタキもこっちを見ていた…！」と何度も複唱していた。

（何か良い事起きるかも…？）とても嬉しい気持ちになり、姿を見せてくれたことに心の中で何度も「ありがとう…」とつぶやいた。

ルリビタキはフィンランドでは、一部のクーサモという地域でしか見られない。ここに行った時、野鳥ガイドは

「ヨーロッパ中のバードウォッチャー達がここに来るのはこの鳥を見たいためだ。ここに生息しているが、たまにしか見られないからがっかりする人が多いんだ。」と言っていたことを思い出す。その時の会話…

「日本では頻繁に見られるのか？」

「同じようにほとんど見られない。私が見たのはこの人生で1度だけ。」

「状況は同じだな。」ガイドは納得していた。

2度目に会ったのは7年目の春、まだ山開きが行われる前の3月下旬の事1460m地点を登山中、もう少しで頂上だったので張り切っていたら、

「フィー！フィー！」野鳥の声を耳にした。こんなに高い地点で小鳥をあまり見ないので驚いた。ウソの声に似ていたのでウソだと思い声のほうを見たが、7~8mの場所に飛んできたのはルリビタキだった！そしてこちらをジッと見ている…！

「こんにちは。もっと近くにおいで！」同じように7~8mの別の場所に飛び移りこちらを見ている。青色がつやつやと輝き、脇のオレンジとの色彩の美しさは言葉では表現できないような素晴らしさ。内面の凜とした芯の強さも感じられ、動くたびに輝いている…。

人が外見だけどんなに頑張ってもこの美しさにはかなわないかも…。

ルリビタキは青い風になったように飛び立って行った…。何もかもが美しく、その出会いは私の心を幸福感で一杯にしてくれた…。

私が不思議なのは、あちらが登山道の近くに来てくれたことだった。野鳥は他の生物に興味を持っている個体がいるのでは？というのは私の考えだが、こうして1人登山しているとそんな気がしてくる。鳥が私を見る時、人のように顔を真っ直ぐにこちらに向けることはあまりなく、横を向いたりしながら、片面で見るのが特徴だと思う。2度も会えたことをとても嬉しく思った。

「姿を見せてくれてありがとう。近くに来てくれるなんて光栄です。毎回でも来てください。いつでも歓迎します。」

マムシに出会う！

それは2年目の秋だった。

下山時に日陰の暗い場所を通ろうとした時、狭い道の脇で何かが妙な動きをした。ハツとして見るとそこにいたのは、今頭を持ち上げてこちらを凝視しているマムシだった！

「あ！マムシ！」おもわず声をあげ、もっとよく見ようと身を乗り出した。

話には聞いていたが実際に見るのは初めてだった。

マムシはさらに頭を持ち上げて「フーツ！」と鼻息なのか何かを荒くしてこちらを睨みつけている。

（これは威嚇だ！マムシに噛まれると危険だった！噛まれたらどうしよう…。距離は1~2m…飛び掛かられたら…）そう思うと怖くなった。

相手は明らかに怒っているようだった。

早く離れたほうが良いと狭い道を行こうとしたら、マムシは私が動くのが気に入らないらしく、頭を低くしたり持ち上げたりして、

「フーツ！フーツ！」と妙な音を出して睨みつけてくる。今にも飛び掛かってきそう...

その迫力にたじろぎ、動くのはやめてマムシが行くのを待つしかない、と思い話しかけてみた。

「あなたの縄張りだったの？邪魔してごめんね。ここは登山道だから私は通って良い事になっているんだ。邪魔しようと思っっているのではなくて、山が好きでここを歩いているだけ。敵意は持っていないし何もしない。」

だが、人の話など聞いていないようだった。とにかく不快らしく、そんなエネルギーしか来ない。

(ヤレヤレ、困ったなあ)

小学校の時に「マムシに気を付けよう」と言われたが、出会ったらどうしたらよいか教わっていなかった。しげしげと観察したら普通の蛇と違い頭を持ち上げられる。この構造には感心した。マムシとコブラは同じファミリーなのか？という思いが浮かんだ。

何分もたつがまだ執念深くにらみつけてくる。

最後の手段として、顔を背け視界にマムシを入れながらも、関心が一切ない振りをして頭でも別の事を考えるようにした。すると...マムシは1~2分すると横に向きを変え道脇に進み始めた。そして脇の茂みに消えていった...

(やっと行った...！無事でよかった。小さいのに凄まじい迫力だなあ！)

噂のマムシに実際に会って近くで観察できたことは良かった。

でも、もう2度と会いたくない...

アカゲラに会う

キツツキ科のアカゲラは日本では珍しくない鳥だが、登山中に会ったのは2回しかない。同じキツツキ科のコゲラは自宅の周りで見慣れているし、木を叩く音は知っている。

木を叩く音がして、音がコゲラより大きいのでアカゲラがいる？と思っていたら一瞬右手10m辺りを飛んだ鳥がいた。白と黒と赤が見えた。

2度目に会ったのは7年目の3月下旬、標高1200m辺りを下山中だった。辺りに響き渡る

かのような大きな木をたたく音がした。音のほうを見ると、そこには大きくて立派なアカゲラが木の幹を夢中で叩いていた。白地に真っ赤と黒が映えていて、とても美しい…。自然の美しさにはいつも心打たれる。

頭の後ろに赤い色があるのでその個体は雄で、木から木へ飛び移りながら熱心に木を叩いている。

フィンランドに行ってバードウォッチャーと話したら、

「アカゲラは気性が荒く攻撃的で、シジュウカラなどの小鳥を襲って食べてしまうから困るんだ。」と言う。私は自宅の庭の餌台に牛脂を付けていて、シジュウカラやメジロが食べに来ているが、フィンランドでは牛脂を付けるとシジュウカラはもちろんアカゲラが来て独り占めをし他の小鳥たちを攻撃して殺してしまうらしい。アカゲラは大きいといっても（体長23.5cm）シジュウカラ（体長14.5cm）の倍もない。そんなことがあるのか信じられなかった。私の餌台に時々ヒヨドリが来て小鳥たちを追い散らかすが、エサが目当てで攻撃して殺したりはしない。この情報は衝撃的だった。

日本ではどうなのか調べてみても特にそういったことは書いていなかった。アカゲラと聞くとどうしても「攻撃的」と浮かんでしまう。目の前のアカゲラは熱心に木を叩いているだけだ。

これは自宅での出来事だが、数年前から冬にモズが現れるようになった。

そのうち剪定してあった尖ったザク口の枝に、スズメの死骸が引っかけられて風に吹かれているのを発見した。これが噂の「モズのはやにえ」だった。見るに堪えないので埋葬したが、このモズが毎年うちの小鳥たちをターゲットにしているのを見ている。

近くの林を歩いていたら「ギャー！ギャー！」とカケスの声がした。

見るとモズ（体長20cm）が自分より大きいカケス（体調33cm）に襲い掛かっていた。カケスは叫び声をあげ、必死に絡みついてくるモズから逃れようとし、飛び回ってなんとかモズを蹴散らして近くの木に避難した。モズはじっとカケスを見ていたが、諦めたのか遠くへ飛んで行った。モズがはやにえにするのは、ネズミ・もぐら・昆虫・小鳥などと図鑑には書いてあるが、自然は分からない。だから「アカゲラが小鳥を襲う」とは図鑑に書いてないが、多分そういうこともあるのだろう。

イノシシは人を襲わない ～自分の体験から…

1人登山を8年続けた私は下山するのが面倒になり、憧れの山に住んでみたいとの前

からの願いを実行して、郊外の標高1000m位の山の中腹500m地点に移住した。無農薬有機栽培の菜園をするのが夢で、荒れた土地を開墾から始めた。村人が次々に来て言う。

「イノシシが出るぞ～。畑に柵を作らないと全部食べられるぞ～。」

「夜行性だしじゃが芋が好物だから、じゃが芋を植えなければ大丈夫。」

意見はそれぞれ。

「夜行性だけど昼間も出てきて怖いんだぞ。山なんか行くとでるぞ。」

家の裏道から山に1人で登っていた私に注意した。

「出たらどうなるのですか？」

「向かってきて怖いんだぞ～。」

「うーん…」（草食の彼らが人に向かってくる…？）私は村人の話をそのまま信じることはできずにいた。菜園の隣の家の青年も私に注意する。

「山にはイノシシの道があって、彼らはいつもそこを通っている。山にはイノシシが出るんだ。」

「けものみちならどこの山でもあります。それに草食なんですよ？じゃが芋が目当てだと聞いている。夜行性だし滅多に会わないのでは？人を襲うんですか？」

「150cm位の大きいのが出てきて、襲ってきて太ももをかじられた人もいるんだ。跡が残って大変だったんだ！」真剣な目で言う。

「うーん…」（実際に体験しないと分からない事。山で会ったとしても私には事前に分かるはず…）人の注意は聞いたが自分の感覚を信じるほうが良い。

私は1人登山の中で、誰もいない山中でばったり男性と会うので不愉快な思いもあったから、事前にどんな人が来るか分かれると便利だと思っていた。毎回そう思い歩いていたら、3年位で足音でどんな感じの人が来るか分かり、5年たつと気配で察知することができるようになっていた。これは誰でも持っているけど普段使わない力なので、私が特別な能力のある人ではなく、誰でも意識すれば持てるもので、登山にはとても便利だった。

（イノシシも事前に分かるはずだから、対処できるのでは…）

村人の話は聞いたが、実際には会って見ないと分からないと思った。

菜園最初の年は柵を作らなかつたら、荒らし放題。大根や菜っ葉の芽まで畝に鼻を突っ込みグチャグチャにしていった。何度畝を作り直しても同じで、かろうじて数個の小松菜が育ち、冬に収穫したらとても美味しかった。自分で体験してみて、柵を作らない限りここで菜園は無理だと分かった。

次の年に山から竹を切り出してイノシシ除けの柵を1か月半かけて作った。かなりの力仕事だったが、立派なのができる、その年から野菜たちはとてもよく育ってくれた。

登山中ある地点に来ると、獣が歩く音とザワザワと茂みが揺れる音がする場所があった。

（イノシシのエリア…？）その辺りは高い木々が生い茂り昼間でも薄暗い場所ではあった。登山道から10mほど離れた場所でほとんどこちらに来る気配はない。そこでイノシシが見えたことが何度かあった。正確に何頭か分からないけど彼らはこちらには来なかったし、私がいることすら知らない様子だった。丹沢登山をしてきた私は、イノシシは野生動物なのに感覚がかなり鈍い気がした。

丹沢の鹿はとても鋭敏だった。登山しているとビリビリと後ろからエネルギーを感じて振り返ると、特に何も無い。（おかしいな？）自分の見える遠くまでしっかり見て何か探すと、かなり遠くで小さく見える鹿の親子がいることがあった。狩人の銃を警戒しているから人間の私も銃を持っていないか警戒している。銃の撃てる距離くらい警戒しないと彼らは生きていけないのかも。そんな時、私は（楽しい登山をしているだけ…）と遠くの彼らに笑いかける。手を動かすと銃を警戒して飛んで逃げてしまうから、体を動かさず柔らかいエネルギーを送ると、普通に歩き始める…。

イノシシは銃で撃たれることもなく生きて来たらしく、山では何も警戒していない感じだった。

曇り空の少し暗い日の昼間に舗装道路を歩いていたら、隣の空き地にイノシシが現れたことがあった。藪から見えたのは3頭くらいで、そのうちの1頭がこちらを向き、私も立ち止まってイノシシを見た。距離は40m~50mくらい。夜行性なので見えているのか分からないけど、向かって来ることもなく、彼らはそのうち藪に入って行った。

最も近くでイノシシに会った事があった。

登山道を歩いていたらある時、ダダダダッところちらに走ってくる音がした。

（イノシシだ。動くとぶつかるかも？止まっていよう。）立ち止まって音が近づくのを待った。現れたのは60cm位のイノシシで、目の前5m程を走り下っていく…。少し行ってから（ん？何かいた？）と立ち止まり、こちらを振り返った。鼻でクンクンクンッところちらの臭いをかいで、

（なんだ、美味しいものじゃないや！）って感じで前を向き、何事もなかったようにダダダダッところちらに走り下って行った…。

これが最も近くでイノシシに会った時だった。私の存在に気付くのは遅いし、襲うこともない。彼らは食べ物にしか興味が無い感じだった。夜行性なので目はあまり良くないと聞く。私をジッと見るというより臭いで判断しているようだった。

イノシシが人を襲うってどんな状況だったのか、私は知りたいと思う。村人たちは全く登山せず山に入らないので、本当の事は彼らも知らないらしい…。ということが分かってきた。

(150cm位のイノシシなんて本当にいるのかなあ?) 都会から来た私を少し驚かせてみようとしたのかも知れない…。

都会の人たちは、イノシシは人を襲うと思っている。

ある時登山道を上がり山頂に着いた時、女性2人が近くにいたので挨拶した。

「1人で歩いて大丈夫?ここは熊やイノシシが出るって聞いたけど…」

心配そうに聞く彼女たちに、

「イノシシならさっきいましたけど…」イノシシのエリアで見たので言った。その言葉が終わるか終わらないかぐらいで、

「キャー——!イノシシ出たのお——?!どうしよう——!!コワ——イ!!」2人共叫びだした。(怖がらせるつもりはないのに、まずいなあ)

「イノシシ何度もこの山で見るけど襲ってきません。イノシシは人に興味が無いんです。」と言うと、今度はシーンと黙ってしまった。

ジッと私を見ている目は(ふつう怖いものを「平気」というこの人は変じゃないか…?)という感じで、こうなってしまうと何を言っても通じない。仕方なく離れた。

都会で人に会って、

「どうですか?田舎の生活は?」と聞かれて、

「イノシシが出るから、菜園はイノシシ除けの柵を作りました。夏夜は窓を開けていると、豚の鼻息のようなのが聞こえて家の周りに来ているらしいです…」イノシシの話をする、

「まあ!嫌~ねえ!!怖いじゃないの!危ないわあ!襲われたら大変よー!!」

「イノシシは襲ってきません…」と言っても、

「イノシシなんて恐ろしい!気を付けて下さいよ!!いやだ~!」と話が進まない。相手の方が変わっても同じで、この事実を説明できない。

イノシシが人に会ったら常に襲うなんて、自分の体験から違うと分かった。

もちろん、絶対に襲わないし大丈夫とは言い切れない。
状況によって、例えば薄暗い曇りの日に、農家の方がジャガイモの収穫をしていたら…。たくさんのじゃが芋をトラックに積もうとしていたら、あり得るかもしれないし、うり坊（子）を連れた母イノシシだったら、警戒心は特別だから、そんなこともあるかも知れない。

彼らは私の菜園のイノシシ除けの柵を、破ったり穴を掘ったりして侵入したので毎年つくろいながら菜園をした。最後は柵を体当たりで根こそぎ倒してしまい菜園ができなくなった。それでも私はイノシシは嫌いではない。（好きでもないけど）彼らの方がずっと前からそこに住んでいたのだから、そこを共有できなければ仕方ない。と思う。

これはイノシシの話だけど、人におきかえると大変な事になってしまう。
事実と違う情報で、人を怖がったり避けたりしたら…。

震災の時、“放射能がうつる”と、その地域の人たちを避けたりする話を聞いた。事実は違う。真実を知らないで怖がって避けるのは、大変な思いをしている方々にさらなる心労がかかってしまう…。

イノシシの体験をした私は、怖がる情報があったとしても、できるだけ正しい情報にアンテナを張っていこうと思った。

ミソサザイのお出迎え

それは6年目の春から夏にかけての事だった。
いつも大倉から三の塔へ登るけど、今日は大倉から塔の岳の大倉尾根を登ってみたら、標高500m辺りでミソサザイの声がした。自宅にある野鳥時計の朝6時がミソサザイの声だったので、生の声を聞くのが初めてでも分かった。そこは木の根が入り乱れて根を張り、落ち葉が腐葉土になっているジメジメとした日陰の斜面で、（こんな所にいるの？）と思ったが、ミソサザイが保護色の土の上をしきりに鳴いては敏速にちょんちょんっと跳ね回っている。日本で最も小さい鳥の一つとあって、姿はとても小さかった。

「こんにちは。この辺に住んでいるの？」声をかけると、ミソサザイはきれいな声で鳴いて少し離れた。観察しているとどうも巣が近くにあるらしい。ある木の根に止まるので、ここが巣だと思った。立ち止まって見ているとミソサザイが警戒すると思って、すぐにその場を離れた。実物を見たのが初めてだったので嬉しか

った…。

姿は地味だが鳴き声はうちの野鳥時計より澄んでいて素晴らしかった。

帰宅して野鳥図鑑を見たら、ミソサザイはそうした場所に生息しているのが分かった。

その2週間後に同じ道を登山したら、またあの美しい声が聞こえてきた。同じように鳴いては敏速に飛び回るミソサザイがいて6~7m近くまで来た。

「こんにちは！出迎えありがとう。また来たよ。」

ミソサザイはきれいな声で鳴きながら前と同じ場所の木の根っこに止まる。

「そんなところに止まると巣が分かってしまうよ。悪い人もいるから気を付けて。人が来たなら静かにして動かないほうがいいと思うよ。」アドバイスしてみた。

暗く陰湿な場所で美しい声が聞こえ、小さな野鳥が来てくれるのは気分が明るくなる…

！

その日の登山も心楽しいものとなった。

しばらくしてまたその道を歩いてみたら、すっかり忘れていた美しい声がした。またあのミソサザイだった！

「出迎えてくれてありがとう！また来るから元気でね！」こうなったらもうお友達。小さなミソサザイに言って別れた。

その年のしばらくの間、こうしてミソサザイの出迎えに会うことができた。

いつも紳士でいられる人

登山では、世の中を普段見られない角度から見られる事がある。時々道を尋ねられることがある。その中には道を尋ねるマナーすら知らない人がいて、これがすべて中高齢者だったので驚いた。青年から道を聞かれたこともあったが、敬語を使う普通の人たちで不快な思いをしたことはない。私も雪の具合などを他の登山者に聞いたことがあったが、敬語は基本だと思う。「すみません。」と声をかけ、教えてくれたら「ありがとうございます。」これが普通だと思っていた。

1度品の良い会話をした紳士がいて、それは山中では珍しく印象的だった。そこは道が3通りもある小さな広場で、よく登山者が迷っている場所だった。その日も下ってきてその場所にさしかかった時、大きな声が聞こえた。別の道から来た中年の夫婦だった。広場に来て私を見つけるといきなり、「下のバス停ってこっち〜？」と聞いてきた。（ヤレヤレ…）私は頷いて情報だけ伝えた。こういう人はお礼も言えないのは分かっていた。

そこから10m程歩いて登山道に入ろうとしたら、50代位の1人の男性が声をかけてきた。

「あの、すみません。ちょっとお聞きしたいのですが…」その丁寧で謙虚な雰囲気、驚いて立ち止まり返事をした。「はい？」

「下のバス停に行きたいのですが（さっきの夫婦と同じ！）ここに道がいくつもあってどれが一番近いのですか？」

「一番近いのはこの舗装道路です。右の登山道は少し登ってまた下るから距離としては少し長くなります。左の道は行ったことありますが、30分かかってどこにも出なかったから戻ってきました。標識もちゃんとしていないし…」男性は頷いて言った。

「左は行かないようにします。右側の登山道は眺めはいかがですか？」私は眺めを意識したことがなかったので、道をずっと思い出し、言った。

「眺めは望めないですね。ずっとこのような大木の森林ですから…」男性は少し考えていたが、

「でもせっかく登山靴はいて来たから、登山道を歩いたほうが気持ちが良いですよ？」

」と、自分の履いている登山靴を私に見せた。足には私ほど歩きこんでない、けど新品でもない登山靴がきちんと履かれていた。

「そうですね！それがいいと思います。」と言うと、

「助かりました。ありがとうございました。」品の良い笑顔で丁寧に頭を下げた。

この会話をさっきの夫婦がすぐ後ろで聞いていた。

自分の都合で知らない人に何か尋ねる時は、相手に不快な思いを残さないようにするのは最低限のマナーで、さらに相手に気持ちの良いものを残せたら、人として素晴らしいものを内面に構築してきた日々の見えない努力の賜物なのかも…。

そういう人を心から尊敬する。

私は登山道を歩き始めた。

(なんて丁寧に謙虚な人だろう…) 会話の間中、品の良い笑顔を絶やさず、こういう方は普段から誰に対しても丁寧にし、今迄の人生でそれを続けてきた、そんな人生までもが透けて見えるようだった。”品の良さは一日にしてならず” 毎日の積み重ねが中高齢者になった時、態度や雰囲気にも自覚なしに出てしまうのはある意味恐ろしいと思う。

登山の半分以上は中高齢者の方々。人は年齢と共に心の成長があるのでは…？と、1人登山するまでは思っていたが、様々な体験から、人それぞれだと分かってきた。人生の夢や目的を持ち、周りへの気遣いを忘れずにいれば、年と共に成長はできるが、自分の都合ばかり優先していたら徐々に我が強くなり、自己中心的になっていくのかも。そんな中、さわやかな気分が残った丁寧な紳士だった。

私も今後の年の取り方・心の在り方を考えさせられた。

山小屋のお爺さんと同じ感性

山小屋には休息でも入らないようにしている。

いつも中高齢者男性陣の音がしているから。オジサンばかりの狭い場所に1人で入っていくのは気が重い。水分・食料は十分に持ち、山小屋に入らなくていいようにしてきた。

4年目の10月の事、25℃にもなる暑い日になり、天気予報でも言っていなかったことで、歩き始めてからひどく暑い事に気が付いた。

太陽はジリジリ照り付け真夏のような感じだった。初めの登りで、先週までとは違うかなりの疲れを感じた。昼食を摂り、

(先週までの水分の減り方とは違う。水分最後まで持たないかも...) 不安がよぎり、さらに歩き続けて、水分は下山分を残さなければならないし、とても足りなかった。ギリギリの事で初めて山小屋に入ってみようと思った。

一番近いのは書策小屋(かいさくこや)で、この人は何度も新聞やTVで取り上げられている高齢の方で確かこの時80代半ばだったように思う。人々が書策小屋の名前に爺さんを付けて"書策爺さん"と愛称で呼んでいるらしい事は、新聞で知っていた。

このお爺さんは標高1200m以上の場所に自分で小屋を建てて住み、登山者の世話をしている。70代くらいからか、下山すると再度登れるか分からないからと、ずっと下りていないらしい。

私はこの小屋に中高齢者男性がたくさんいなければいいなあ、と思いながら小屋の前に立った。

小屋の戸は人が1人半くらいの幅が開いてあり、中は暗く静かだった。

(誰もいないのかな?) 強い日差しに照らされた中を歩いてきたので、目が暗い場所に慣れていなかった。ためらいながら声をかけた。

「すみません。」中で人が動いた。昼寝をしていたらしい。

「水分が足りなくなって、水があつたら買いたいのですが...。」

「水は売ってないけど、お茶ならあるよ。300円でここで飲み放題だ。」と、小屋の中のテーブルを指す。

私は狭く薄暗い小屋に入りたくなかった。ペットボトルの水を買って早く離れたかった。しかし、前の人飲んだ湯呑がまだテーブルに残っていて、ここには湯飲み茶わんしかなかった。このまま水分を取らないと良い状態を保って下山することは、経験上不可能だった。

入り口から1歩入った場所にイスと机があり、すぐに外に出られるから1杯飲むだけ...と、思い、

「じゃ、お願いします。」と言った。

お爺さんは300円受け取ると、目の前の湯飲みをかたづけ、新しいのを置いた。そして机上でポットから大きな急須にたっぷりとお湯を注ぎ、その急須を私の前に差し出した。お金を払ったとはいえ、30代の私は80代の方にお茶を用意して頂くのが、なんとなく恐縮した。

小さい湯飲みにお茶を出して飲むとぬるかったが、それでも今はありがたかった。1杯のつもりが、飲んでみるとまだ足りなかった。もう1杯出して飲み、少し落ち着いた。

「今日はいきなりこんなに暑くて、今迄の水分では足りなかったんです。」まだ出る汗を拭きながら言った。

「今日は暑いからね、そういう人がよく来るよ。」お爺さんは言った。

「新聞でこの小屋の記事を読みました。今80代なんですか？」

「うん。だんだん寒さが骨身にしみてくるようになった。でも下りたらもう登ってこれないだろうから、もう何年も下りてないよ。」記事のように答える。

「この小屋、ご自分で建てたそうですね？」

「もう、何個も建てちゃあー毎冬、強風で屋根飛ばされて大変だったよ！いつも谷川から飛ばされるから、谷川に多く釘を打ったり工夫して建てて、今度はいいぞ！と思ってもまた飛ばされて...みんなに、

"ここは小屋建てられない場所じゃねーか？無理だ"って言われたよ。でも諦めなかったんだ。何度目かに屋根の軒を下に曲げてみたんだ。そうしたら風に負けないようになった。みんな驚いて、

"冬でも飛ばない小屋こっちにも建ててくれ"って言われて、あそこのも頼まれて建てたんだ。」と、少し下の山小屋を指した（標高1100m）

そこに小屋があるのは知っていたが、あの小屋まで建てたとは...

それに何度も屋根を飛ばされて...とは新聞に書いていなかったのもとても驚いた。このお爺さんは何度も諦めずに工夫して一つの場所で頑張り、飛ばされない小屋を建てた。これは人生の試練とも同じではないか...？

諦めずに何年も一つの事に努力して、克服・達成すると、それは人生の深い喜びと、自尊心をもたらしてくれるものとなる...

さらにお爺さんは言った。

「やっぱり人間一つの場所で苦労しないとダメだね。屋根を飛ばされて諦めた人はいたけど、そこまで終わってしまう。だけど自然と折り合いつけていくには自分が変わっていかないと...。いろいろ工夫していく中で分かっていく事は大きいよ。自分が賢くなるんだ。」お爺さんは人生論や幸福論を話しているつもりはなさそうだが、これは小屋の話ではなく、人生哲学ではないか？人生における様々な試練に置き換えられるように感じた。

私は自分の事に置き換えてみた。[20代母の看病](#)を何年もして一つの場所で頑張り、手探りで工夫し続け、自分が変わっていかねばいけない事態に何度も追い詰められた。辛かったが諦めも逃げもしなかった。ただ前向きに努力し続けてきたその結果、自分なりの人生観・死生観を持つことができ、人生の深い満足感、自尊心・達成感を得るこ

とができたと思う。

今は面倒な事を人に押し付けてでも、自分は楽しんでいい思いはたくさんしたい、そんな風潮を感じることもある。楽ばかり選んでいたら深く考える事も、真の豊かさを学ぶこともできず人生の終わりになるにつれ内面は辛くなっていくように思うのだが...

「ずっとこの静かな場所にいると、下界に下りた時騒々しくて。特にテレビが苦手。ここではずっとラジオだからね。テレビは映像で物を強制してくるようで刺激が強すぎる。テレビは見らんねえんだ。」さらに驚いた。私もテレビはすぐに疲れてしまう。自然モノやドキュメンタリーは映像があまり動かなくて心が豊かになる気がするが、それも2時間も見れば疲れてくる。何時間も見られる人が不思議だった。

お爺さんの話にすっかり引き込まれていた。私が3杯も飲んで空になった急須を見て、

「まだいるか？」と聞いてきた。まだ足りない気がしたので、
「お願いします。」と答えた。ポットから急須に、またたつぷりとお湯を注ぎながら話してくる。

「下界は人が多いけどここにいるほうが世の中の事がよく分かるんだ。」
「えっ？どうしてですか？インターネットで世界中つながって情報量は下界のほうがはるかに多いと思うけど...。」驚きながらつられて街の事を"下界"と言った。

「う～ん、それはそれで違うんだよな。ここにいて来た人たちが話すのを聞いているだけだ。でもそのほうが世の中の事がよく分かるんだ。下界では、みんな心開かなねえからなあ。」

「人が下界で言うことと、ここで言うことは違うのですか？」

「ああ、違うね。」お爺さんは言った。

「それはここに来る人と、下界の人と別の人だからじゃないですか？」

「それはそうだけど...結局そんなことは関係ないな。下界ではいろいろあるだろう？見栄張ったり、本音で話さなかったり...。でもここに来る人たちは本音で話すからな。」
...私はお爺さんが言っていることがよく分かった...

下界では立場があつたり、生きていかなければならないので、何でも言わないようにして、やたらと本音で人と話さない。だが自然の中に来て解放感に浸り、自分がどこの誰なのかこのお爺さんに分からないし、利害関係がないから安心して本音で話すのだと思った。ここに来て本音で話す人がいつも本音で話しているのではなく、下界に戻れば話さないのだと思う。

私は湯飲み茶わん5杯も飲み、すっかり汗も引き、ゆったりとした気分になっていた

。この小屋にいると外の登山者の足音が、想像以上に大きく聞こえた。お爺さんは話しながらも登山者が外を通るとチラッと外を見ていた。こうやって何十年も外の登山者を気遣ってきた…。

私は戸口から1歩入っただけの椅子に座っていたので気が楽だった。話している間中、誰もこの小屋に休息に来なかったので、話は中断されることなくずいぶん中身の濃い話を伺うことができ、心まで満たされた気分になった。1杯ですぐ出るつもりが長居してしまった。そろそろ行かないと日暮れまで下山できない。

「そろそろ行きます。ありがとうございます。」湯飲み茶わんを返し、立ちあがった。

「ああ、気を付けてな。」戸口を出る時にまた、

「いろいろありがとうございます。」お辞儀をして、歩き始めた。

…私が小屋を利用したのはこの時1度だけだった。

その後前を通っても、用もないのに「爺さん元気？」と言える性格ではない。それでも小屋が開いていたり、中から声がすると安心した。

だが、昨年从那その小屋は閉まっている。きっと下界に下りたのだと思う。生活楽しめているかな？

良いお話をありがとう…。

[情報によると2009年没、2010年小屋は無く跡地となった。]

みな対等な存在

6年目の春、来週山開きになる、という日だった。

一通り歩いて塔の岳山頂に着き、大倉尾根を下山しようとしていた時だった。

「すみません…」向こう向きになって山々を眺めていた男性に声をかけられた。

「あれは、三の塔ですか？」男性は山を指しながら聞いた。

「そうです。」その後も一つ一つ山を指して名前を聞いてきた。

「はい、そうです。」と答えつつも（どうしたのだろう？）と思った。

一通り見える山の名を確認すると、男性は、

「あ、やっぱりこれで良いのですね？はあ一覚えてた！実はここに来たのは40年ぶりです…もう忘れていたかと思ったら、好きな山だったから覚えているものですね…うん…」自ら喜びをかみしめている…。私は30代で、40年という歳月は私には実感も想像もできなかった。

「40年…じゃ、そうとう懐かしいものなのでしょうね…？」

「ええ、18～20歳の頃によく来ていました。最近よくこの辺を思い出して突然来たくなくて来てみたんですけど…やっぱりキツイですね。若い頃は何でもなかったけど…。ただ若い時は何にも見ていなかったな、と思いました。こんなに素晴らしい自然を見もしないで、ただ早く歩いていただけだったから…今回来て、一つ一つ感動するんです。」 静かに話す。

(この人は話していて丁寧だし、興味深い)

「自分で心の成長が分かるんですね？それはきっと素晴らしいのでしょうか？」と言うと、

「ええ、だけど歩くのは遅くなりました。ここの登りはコースタイムより1時間も遅かった…。やっぱり年には勝てない…。」下を向いた。

「それは、自分のペースで登らないと。コースタイムは目安というだけでそれより遅いからって別に劣っているわけではないから…。賢明なのはいつも自分のペースで歩くことです。」キッパリと言ったので、男性は少し驚いたように私を見た。

「特に1人歩きの時は歩けなくなったらおしまいです。早く歩けるか、ではなく、遅くとも自分のペースで体に負担をかけずに歩ききるか…ということだと思います。私はよくここに登山に来るけど、足を怪我した年配の方々を見ているから。年齢がある程度いっていたら、自問自答しながら体と話し合っただけで自分のペースで歩くのが一番です。」自分の意見を言ったら、

「ええ、そうですよね…。」と、安心したように少し微笑んだ。

「今千葉県に住んでいまして、ここに来るまでに5時間もかかってしまって…。」 (!!)

「5時間!朝何時に家を出ましたか？」

「始発ですから、5時代です。」(そんなにしてまでここに来たかった…?)

「そんなに遠いのですか。よく来られましたね…。私は毎週ここに来ているんですけど、登山口まで1時間半くらいです…。」

「近い方はいいですね。私も近かったらしょっちゅう来たいけど…。でも、また登山を始めようと思っているので、ここにまた来ようと思います。」

20歳に40年足してで60歳。きっと定年退職した方…。

毎週来ている塔の岳に、5時間かけて40年ぶりで来る人もいるのかと、ただ驚くばかりだった。この風景を40年ぶりに見る人と見ていると、同じ風景が少し新鮮に見えるようだった。男性はこの小屋に宿泊して明日は私が歩いてきた三の塔方面へ行くらしい。少し寒くなってきたので、

「そろそろ行かないと…。」と別れて下った。

…このような話は初めてだった！

「40年ぶり…5時代…始発出発…」と、何度も思い出していた。普段聞けない話は興味深く、自分の心を少し広くしてくれたように思う。

これはお互い1人だったからこういった会話ができたとと思う。仲間がいるとそこで世界ができているからあまり他を見ない。1人だと、そこから世界が広がっていく。そして相手の方が私を対等な存在だと思っていたので、この会話が成立したことに嬉しさを感じた。中高齢者の中には、年下だから、女性だから…と軽く見て、失礼な態度をするものもいる。自然に親しみを持ち、真に登山が好きな人は、相手を尊重するのが普通なのかもしれない。

私は人も野生動物も鳥も花も植物も木も、みな同じように大切な存在だと思っている。特に登山中はそのことを感じられる、それも1人登山の醍醐味である。

"迷惑！"と思ったことを相手に伝えてみた

登山を始めて3年目くらいの出来事…。

大山山頂からヤビツ峠までの登山道を下っていたら、後ろから登山者が来たので避けた。その男性はバス停まであと10分の道を先に行った。

私を追い越した途端、突然タバコを吸い始めた。

今まで山の美しい空気を堪能してきた私は、タバコ臭くてすっかり登山気分が台無しになった。別の道を行きたくてもここは狭い1本道…。

(せめて追い越す前に吸えばよかったのに…。) 我慢しながら思った。

喫煙者は気が付かないだけ…。

山に来てこんなに空気の良い場所でタバコを吸う人の気持ちが分からない。1本だけだと思ったらバス停までずっとで、私はその男の後ろを歩くしかなかった。バス停に着くとその男しかいない。

まだタバコを吸いながら、私に話しかけてきた。

「いや～。この道きついですね～体がなまっちゃって～。」

私は相手を見ただけだった。60歳位だった。

「この間来た時のほうがまだ軽かったなあ～。今度は表尾根に挑戦しようと思って～。」これから登山を続けるらしい…。

(それなら "迷惑" と思ったことを伝えたほうが良い…)

逆ギレされると面倒なので誰か来ないか見回すと、丁度バスが来た。

バスに乗ると運転手がいる。

私は座席に荷物を置くと、イスに座った男の側に行った。

「あなたはさっき、私を追い越してからタバコ吸いましたよね？」

ポカンとした顔をして、思い出しているようだった。

「あ～ええ、タバコ好きでね～。登山の後は吸いたくなるんですよ～。」

「あなたがタバコを吸いだして、後ろの私はバス停までずっとその臭いが臭かったんです。せっかくキレイな空気を吸いに来ているのですから、今度吸う時は人を追い越す前か、あるいは下山してバス停から少し離れて吸って頂けませんか？登山のマナーだと思うのでお願いします。」緊張した。

「はあ～。」男は思いもかけないことを言われた様子だった。

言うことを言ったので席に戻った。

ご本人が分かったか分からないけど…

また、同じことをするかも知れない…

それでも迷惑する人がいる事は伝わったと思う。

運転手に近い席に座り様子をうかがったが、特に不穏な動きは感じられなかった。そのうち次々と登山者が来てバスに乗った。

バスが駅に到着し、電車に乗り換えても何もなかった。

やっと安心し、くつろいで電車で帰宅した。

第4章 山に関する嬉しかったこと

心が洗われたその一言

登山4年目、下山した帰りの電車内での出来事だった。
空いている椅子に座ると両側には男子大学生が座っていた。2~3駅行ったところでどつと混んできた。正面の席に中年女性が座り、両手に買い物袋を持っていたのを両脇に置いたので、その女性は3席も取ってしまった。

そこに品の良い白髪の男性が来て「すみません…」と、買い物袋をどけて座れるように女性に声をかけたが、そのオバサンは（重いからどけるの面倒〜!）とでも言うように荷物を見て年配男性を見上げ、

「うっふっふ〜」と笑っただけだった。

「あ、いや、いいです…。」男性は遠慮がちに笑いながら打ち消した。

（1つは膝に置いてもう1つは足元に置けばいいのに…）

すぐに立ち上がり男性の右肩を軽く叩いた。

「こちらにどうぞ。」今まで座っていた席を指した。

「あ、これはどうも…」少し驚きながらも座ってくれた。

席を替わってその場にいるのは好きではなかったので、男性から1つドア離れたドアの近くに行った。もっと遠くに行こうとしても混んでいて人をかき分けて通ることはできなかった。

私は20代何年も母の看病をして見送り体験をしている。まだ母が電車で病院に通える時に、親切な方々に母に席を譲って頂き、嬉しかった体験がある。その後自分が席を替われる機会があれば、必ず替わりたいといつも思っていた。

私はその電車で1時間乗って帰る。

いつも6時間のハードな登山をして、電車で立って1時間帰るのは平気だった。

だが、その日はなぜか右足と右腰が痛くなってきた。

怪我をしていないのに下山時も少し痛かったことを思い出した。

こんなことは初めてだった。

3万歩も歩き続けて負担だったのか？…いつもの事だから負担のはずはない。でも次第に立っているのがおぼつかないくらい痛くなってきた。

（どうしよう、席を替わった時に限って…降りる駅までもつかな？）

右足に体重をかけられなくてドアにもたれていた。

徐々に心細くなってきた。こんなに痛い事は初めてで

（自分の体を考えてから人の事をしたほうが良かったのかな...）痛みに耐えかねて、後でこんなことを考えている自分が少し悲しくなっていた。

電車は私が下りる2つ手前に止まった。

外はすっかり暗くなり、ガラスに映った人々が降りていくのをぼんやりと見ていた...

「さっきは、ありがとう！」突然大きな声が後ろから響いた。（！？）

前のガラスを見ると、さっきの初老男性が私の後ろ姿に笑顔で声をかける姿が見えた…
！

驚いて振り返ると、笑顔で輝やいた初老男性が右手を顔の前で真っ直ぐに立てて、拝むようなしぐさをして、もう一度大きな声でハッキリと言った。

「ありがとう！」

「あ、はい…」返事をするのが精一杯、男性は笑顔で降りて行った。

男性から見えない場所に来ていたので、私の事は忘れていると思っていた。今迄年配者に席を替わった時にお礼を言われることはあっても、そのずっと後で言われることは無かったので、この一瞬が夢のように感じた。

わざわざ見つけてお礼を言ってくれたその気持ちに、心洗われる気がして嬉しくなった。痛みもずっと軽く感じる。さっきまで迷っていたが、

（次からこういうことがあっても、親切にしたことを迷わなくていい）と思えた。私は自分を守って席に座っていたよりも何倍もの喜びを与えられ、不思議な事に痛みは軽減し無事帰宅できた。

空手の有段者と”気”の話をした

1人登山をしているといろいろとある。

私は護身用に空手でも習おうかと道場へ足を運んだ。

そこは女性の先生が指導していて、生徒も女性なので入り易そう。

その時、先生1人、生徒1人、男性トレーナー1人しかいなかった。

「体験してみる？」先生に言われて、トレーナーが基本を教えてくれた。20分ほどやっているだけで汗が出てきて休憩にした。

生徒は黒帯でマンツーマンの指導を受けている。向き合って構え、張り詰めた空気が広がり、パシパシッと音を出して打ち合いしている。

(当てない流派なので、正確に言うと当ててはいないが音はしていた)

見学していたら隣のトレーナーが話しかけてきた。

「どうして空手を習おうと思ったのですか？」

「私は何年も1人登山をしていて、何時間も歩いていて誰にも会わない時もあります。そんな時誰かの足音がすると緊張して”どんな人が来る？”と、神経を集中することを何年もしていたら、最近では足音でどんな人が来るのか分かるようになって、音がしないうちから気配で分かることもあるんです。」最近自分でも不思議な鋭い感覚を話してみた。

同年位のその青年は驚いたように目を見開いて、

「気配で分かるんですね？それは”気”だな…。それは空手にも通じるものがあります。空手でも相手の出方や心を読んでいきますから、相手の性格も分かります。きっと非日常の山中で危機を感じる心がそういった感覚を研ぎ澄ましたのでしょう。」 (!!) こんなこと普通では理解できないことだけど、同年位の空手の有段者が理解して、尊重しながら答えてくれるのが嬉しかった。

「だから姿を見なくても、足音や気配で嫌な感じの人は分かるんです。そんな時は、茂みや大きな木の裏に隠れて相手が通り過ぎるのを待ち、行ったらまた歩き始めます。そういう人と争おうとは思っていません。」

「それが一番賢明なやり方です。変な雰囲気の人にはこちらの姿を見せない、それが護身です。」トレーナーは言った。

「今まではそれで良かったけど、なにか身につけていたらもっと安心だと思いました。」私の言葉にトレーナーは少し考えてから言った。

「私の尊敬している中国の空手の偉人がいて、その方は”修行して自分の精神と気が高まると悪い気を持った人が近づく来なくなる”と言い、私も納得しています。この意味は自分が低い気を持っていると、嫌な気を引き寄せてしまう。自分が高い気を持つと低いものは近寄れず、高い気を持った人が周りに来る、ということ。闘うのではなく、それ以前での護身であり、私もそれくらい高い気を身につけたいと思っています。」

(私が目指しているのと同じ…!!)

「分かります。それが理想ですよね…。」しみじみと言うとトレーナーは頷いた。空手と登山、それぞれ別なものなのに、目指している精神世界・位置が同じとは…！話す事がよく理解でき、しばらく気と精神の話をしていた。

私は同年代でここまで考えている人がいて、嬉しさが安心感に変わっていった。話しているうちに、自分の生き方が良い方向を目指していることが改めて分かった。今迄通り日常から他を尊重し感謝の気持ちを持って生きることを持続すれば、相手を倒さなければならない事態にはならないと思った。

日本には書道・華道・柔道や空手などの道があるが、その道は技も高めながら精神も高める。それなら私はここまで歩いてきた登山で精神を高めたい、と思った。今日ここに来て実のある話ができただけのも、何かに導かれて自分の生き方を肯定できる場所に来れたように思い、今後もそれほど危険がなく登山が楽しめる気持ちになり、丁寧にお礼を言って道場を後にした。

同年代の女性と会う

登山8年目の秋、秋晴れに美しく紅葉が映え、カサコソと落ち葉の音が心地よい。シジュウカラなどの野鳥・カラ類が楽しそうに木々を渡り飛んでついてくる。大倉から三の塔までの2時間、急坂を登り続けるこのコースを歩いていると精神的に満たされた気分になる。見慣れた自然が温かく迎えてくれ、木々・小鳥たち・木漏れ日やリンドウの花に挨拶しながら登って行った。

三の塔に着いたら富士山が見える。初冠雪を記録した富士山は秋晴れに映えて美しく輝き、頂上の人々は感嘆の声を上げていた。紅葉の時期なので登山者は多かったが、ほとんど男性か中年女性のグループだった。

そこから塔の岳を目指して歩き始めた。半分くらい歩いた頃か…
山々を見渡ししながら立ち止まっていた私に挨拶の声がした。

「こんにちは！」振り向くと笑顔の1人の女性が見つめていた。

「こんにちは」答えて行こうとすると、女性はまだ私をじっと見つめている。よく見ると同年代の女性…！

私は嬉しくなっておもわず微笑んだ。

…以前1人歩きの若い年代の女性と会ったのは、いつ頃だったか…？

このコースは厳しいので頻繁にはいない。

それはもう、思い出せないくらい前の事だった。

私と同じでその女性は1人でこの厳しい登山をしているらしい。

少しも疲れを見せない輝く笑顔はとても美しかった。

お互い見つめていたが嬉しくて何も言葉にできない…。

”同志”と認めるような気持ちが交差して…そして入違って歩き始めた…。

話をするほどお互いに余裕はない。以前出会った時もお互い微笑んで同志のように嬉しくなった。自立的・自律的な女性は美しい。一瞬の事だがこんなに心が温かくなり、いつ思い出しても嬉しくなる。

私が1人登山をするようになったキッカケは、1人登山をしている女性に会ったことだった。父とこのコースを歩いていたら、紺色の地味な服を着た同世代の女性に会った。挨拶すると汗で輝いている顔がはにかむように微笑んだ。物静かで自律的で美しく、かっこ良かった。

（こんなに厳しいコースを1人で歩いているとは、なんて芯が強く微笑みの優しい人だろう！）彼女は元気な体育会系で何でも跳ね返す感じではなく、物静かで足音や周りの空気まで静かだった…。

一瞬の出会いが強く印象に残り、彼女の雰囲気や微笑みは思い出すたびに私の憧れになっていき、（いつか自分も1人で行ってみたい）と思うようになった。私も体育会系ではなく物静かなほうだが、物静かな彼女が歩いていたことが希望になり、それから1人登山を始めた。初めは体力を考えて低山ハイクをしていたが、昼間から飲んで酔っ払いや、たむろして酒たばこなどの若者がいて、あまり落ち着かない。徐々に標高を上げて今の厳しいコースに落ち着いた。このコースを歩けたとき、1人登山をしていた女性になれた気がして深い喜び一杯に満たされた。

（あの女性のように、私は物静かで自律的で美しくなったのか…？）

正直なところ自分では分からなかったが、自然と一体となったような感覚、厳しいコースを歩き切った達成感で、心の底から満足感を得て、自分自身でいられる幸せに満たされていた。

そのうち自分の登山に夢中になっていき、人生の一部になった。

同じ登山用時計をしているフィンランド人青年

父とフィンランド旅行に行った時のこと。

ラハティという自然豊かな場所でハイキングをしようと、ガイドと待ち合わせをしていたら、ユルキという青年が現れた。まず昼食をとってから、と食堂で食事をとっていたら、

「驚いた！同じ時計だよ！」ユルキが突然大声で言った。

ユルキの腕を見ると、私と全く同じカシオのプロトレックがあった！

(まさか！フィンランドには山がないのにどこで使うの？)

「カシオのプロ・トレック？」確認するとユルキは頷く。

「どこで買った？日本？」

「違うよ、ロンドンのヒースロー空港で買った。登山用時計が欲しかったから、これを見つけた時は嬉しかった！」

「ヒースローで売ってたの？私は東京で買ったよ。」

「いくらだった？」急いでユーロに直して答えると

「うーん、だいたい同じだな。」満足そうだった。

これは標高が表示され、さらに気圧が表示されるために登山中の天候変化などもだいたいわかる仕組み。登山記録を作ることできる。

「4年前に買ってずっと使っているんだ。登山の時は便利。この商品に満足している。」

「えっ？私も4年前に買っていつも使っている。確かに登山時は便利だね。」

「4年前？そこまで同じかー！」ユルキは楽しそうに言った。

”登山の同志”のような感覚になり、お互い微笑んだ。

「ベルトは赤？こっちは茶色だ。これは色々取り換えられるからね。ふーむ、赤もなかなかナイスだ！」楽しそうに褒めてくれた。

「茶色もシックでいいね。ベルトが違うだけで雰囲気はずいぶん違うね。それで標高どれくらいの高さまで登った？」

「スイスに行った時、よく覚えていないけど、多分4~5000かな。登山は好きだから、よく外国の山に登りに行くんだ。」

「それは良いね。私はニュージーランド登山で2040m位。スイスの標高を時計に記録させた？」

「機能は知っているけどまだ使っていない。そのうち記録するよ。」

(私も記録していなかった。2040m記録しておけばよかったな)

「ニュージーランド2040m？日本にはあの高い山があるだろう？あそこには登らないのか？」ユルキは不思議そうに言った。

富士山は子供の時5合目までしか行っていない。そう言うと、

「そのうち登ればいい。国内にあるんだからいつでも登れる。フィンランドには山はないから、そのうち富士山にも登ってみたい。フィンランドにいる時標高測れないから画面は普通のにして、外国登山に行くときに標高画面にしている。」

「私も登山時以外は測れないから普通の画面にしている。」

私は前から感じていた唯一の不満を言った。

「これで測れる標高は正確なものではないでしょう？正確なのを測れると思っていた！」

「そう、アバウトだ。気圧で測っているからね。でもこんなに小さい時計でここまで測れるのは今迄見たことがなかったよ。そのうち日本のメーカーはもっと正確に測れる時計を販売するかもよ。」…うん、そうかもね…。

私たちは2泊3日のラハティ滞在中に、ハイキングやバードウォッチングを楽しんだ。ユルキは物静かで真面目、自然の知識が豊富で、色々なものの見方が公平な感覚を持っている。そして、ちょっとユニークだった。友人達にも会ったが、皆親切な人たちだった。

日本でも同じ時計をしている人に会ったことがないのに、山のない国で持っている人に合うとは夢にも思わなかった。ユルキが山を愛する気持ちの良い人で良かったと思った。

-----この話には続きがある。ユルキと再会する機会があった。

再会を喜んだ後、時計をどうしたか聞いてみた。

「今でもしているよ！」あの時と同じように腕の時計を見せてきたので、私は自分もしている時計を見せた。

「今でも使っているんだね？それはいい！」ユルキは笑って言った。

今もユルキはどこかの国の標高の高い山を、この時計と共に歩いているかもしれない…。

男子高校生の幸せな話

塔の岳登山をして下山したバスの中での事…

1人掛けのイスに座っていたところ、年配の男性の大きな声がした。

「すごいなあ！1人で塔の岳登山してきたのかあ～！」

「はい。」張り切った少年の声がした。

隣に座っている少年に声をかけたらしい。聞こえる声が耳に入った。

「ボク実は高校に行けなくなって、引きこもりだったんです…。」

「え～?! そうなの～?! 信じられないなあ～。」男性の大きな声が聞こえる。

「親に毎日怒られるし、部屋で昼夜逆の生活で好きなお菓子ばかり食べてゲームしてたら太ってきて、動くのがおっくうになって…このままじゃババいって思って…。何とかしないと近所のプールに泳ぎに行きました。」

「え～？引きこもりだったのに、自分でプールに行ったのかあ？そりゃ勇氣あるなあ！」大げさのようだけど、男性は温かく対応している。

「そこはおじさんとおばさんばかりだったけど、みんな話しかけてくれて楽しかったから毎日行ったんです。その中の登山好きな人たちに、

”登山はいいよ～！行ってごらん？”って何度も勧められて、プールで体力ついてきたからここが近かったから来てみたんです。」

「1人で来たの？」

「はい。大倉尾根で塔の岳に登りました。キツかったけど頂上に着いたら気持ち良くて楽しかった！それで毎週来るようになったんです。」

「1人で毎週来てんの？すごいなあ～！」

「毎週来てたら太っていた体重が減ってくるし、他の人と話すのが楽しいし、早く歩けるようになってきて…。引きこもっていた時は、生きていても何も良いことないって思ってたけど、今は生きてて楽しいです。」高校生は本当に楽しそうに話している。

「え～？すごいねえ～。引きこもっていたのに、今は毎週こんなキツイ登山して、みんなと話して楽しんでるなんて勇氣あるなあ!!」

周りにはいるシルバー世代の女性登山者たちも口々に声をかけている…。

「すごいわねえ～。なかなかできないわよ～。」

「えらいわねえ～。」嬉しそうな少年の笑い声が響いた。

聞こえてくる話を聞いていた私も、少年を勇氣と内面の強さがあると思い、周りのご年配の方々の包み込むような優しい言葉を聞いて、とても幸せな気持ちになっていた。

登山は”生きていて楽しい”と思える、”自分でいられて嬉しい”と感じられる、そんな不思議な力があることを、ここの登山者皆が知っているのかも。

「でもまだ高校には行けてなくて…。」言葉を続ける少年は小さな声で言った。

「おまえなあ！こんなにすごい事1人でやってんだぞ～！高校に行っているよりずっとすごい事だあ～！自信持っていいんだぞ～！ぜったい良い人生になるはずだからな～！こんなすごい10代過ごしているヤツなんてなかなかいない、良い人生だぞ～！この経験が先の人生で絶対役に立つからなあ～！」年配男性は、大げさなくらい大声を出して褒めた。

周りの年配女性たちも、

「そうよ～。すごい事なのよ～。」

「自信持っていていいのよ～。」と口々に言っている。

「あ、はい。」嬉しそうなさっきの高校生に戻って明るく笑った。

(この年配男性はいい人だなあ。周りの女性たちも優しい。) ご年配の方々の当たりの柔らかい優しい雰囲気、こちらまで温かな気持ちになった。

少年は必ずいい人生を歩める気がする。今日の登山も良かったけど、バスの中でこの会話を聞いて本当に幸せな気持ちになった。

仲間...？

4年目の秋の事...

10月になったというのに、その日は25℃にもなる暑い日になってしまった。持参した水分の量はやや少なく、20℃以下に慣れていた体も驚き、体力を消耗して疲れが出ていた。それでも山頂は清々しく登山の満足感を十分に味わえた。下山はかなり疲れていて早く歩けず、日暮れまでに下山できるか自分にしてはギリギリの感じだった。時間が遅かったのも、下山しても他の登山者に誰にも会わなかった。

バス停まであと1時間ほどの場所にきた時、前に年配の男性が見えた。けがをしたのか左足を引きずっていた。後ろから見ていてかなり辛そうで、この人はこのまま下山できるか心配になった。

(荷物くらいなら持ってあげられるかも...) ...でも自分も今日はこれで精一杯、いつになく10割の力を使っている。今は持てても1時間下山できるかわからない。途中で置いて去るのはもっと辛い。

(この人も1人で来ているのなら、私のように誰にも頼らないという決心はあるはず。それにこのペースでは1時間では下山できない。1人登山では自分の身を守るのが先決。自力でバス停まで降りる。これが最も重要) 冷たいようだが何も言わないことにした。追い抜く時に、後ろから挨拶した。

「こんにちは」その人はハツとして、

「あ、こんにちは！」ハッキリとした声で答えた。その声には張りがあり、まだ気力は充分にあることを意味していた。

(これなら大丈夫。体力はギリギリでも気力でバス停まで下山できる...) すっかり安心して、自分もなるべく早くバス停に...と集中して下って行った。

30分位下ったあたりで、ゴロゴロと岩がある急勾配の細い道を注意して下っていた時、50m程下の地点から私をジッと見上げている年配の男性がいることに気が付いた。

(何...？気味が悪い...) 視線を合わせないように慎重に下って行った。

10m位に近づいた時突然大声を出してきた。

「すいませ〜ん！足引きずっている男追い越しましたあ〜？」

(さっきの人...)

「追い越しましたけど。」足を止めずに下りながら答えた。

「どれくらい前ですかあ〜？」

「さあ...30分位前ですけど...」言った途端、

「まったく何やってんだ、あいつよお〜！もたもたしやがって、えらい迷惑なんだよお〜!!」男は大声で文句を言いだした。様子を聞くからには多分仲間だと思うけど、このヒドイ言い方は...!!

「奴と一応仲間だね、せっかっく来たのにあいつのせいで登山気分が台無しなんだよお〜!!」

(な、なんて人!!仲間が怪我して足引きずっているのに置いて先に行く!!ここではよく登山者が行方不明になったり遭難してそのすべてが高齢男性なのに...危機感もないし、これが仲間?)

「ふざけやがってよお〜！ったく足手まといになりやがって、あんな奴連れてこなければ良かったよなあ〜〜〜！」

(私が登山気分が台無し!)気分が悪くなり男の横をすり抜けて下った。これ以上何も聞きたくない。だが、また後ろで大声を出した。

「ちよっとお〜、あのさあ〜！30分ぐらい下りたところで男が2人待つてんだよね〜。そいつらも仲間でさあ〜、けが人連れて帰るからもう少し待つてろって言っといてえ〜〜!!」

(な、なんて人たち!仲間が3人も揃っていないながら置いて行って...しかもこれが知らない人にものを頼む言い方?)唾然としたまま前を向いて歩きだした。

「分かったああ〜〜〜?言っといてよおお〜〜〜!!」私の後ろ姿に叫んでくる。急いでその場を去り男が見えない場所まで来た時、息を整えるために立ち止まった。

(なんだかヒドイ話だな。このエリアでこの間60代男性が遭難したばかりなのに...)それはグループで来て1人で用足しに行行って迷い、仲間は先に帰ったと思って置いている。かれ、次の日捜索隊が見つけた時はあの世だったという事故だった。私の歩いている登山道で起きたこの件は、かなりショックで、この時もグループ登山の危機回避の基本を父と話題にしたばかりだった。(父は20名以上の登山グループリーダー)

山では最悪"死"があるのに危機感もないこの人たちに疲れてしまった。

(2人がいたら黙って通り過ぎようか...)

歩き続けだんだん日は落ちかけて少しずつ暗くなりはじめた。あの男の出現ですっかり疲れ果てていた私は、

(この身を無事に家まで運ぶことだけ考えて、後はエネルギー使わないようにしないと...)

あと20分でバス停となった地点で、道の真ん中に男が2人突っ立ってこちらを見ている。近ずいても山のマナーの挨拶する様子もなく、彼らはそっぽを向いた。だが、山では1つ間違えれば死がある。ここで伝言しないで万一後でニュースを見て後悔するのは嫌だった...

「4人で来た人達ですか？」私の言葉に2人は驚いた様子でこちらを向き、頷いた。

「さっきもう1人の人に会いました。けがをしている人を連れて下山するから、もう少し待つように。って伝言です。」それだけ言って立ち去ろうとした。

「けが人の様子は？」そのうちの1人の男が聞いてきた。

「後ろから見たら足を引きずって辛そうだったけど、声をかけたら返事には気力があって下山できそうだと思います。」そう言うと、男2人はフンツと頷いてまたそっぽを向いた。

(けが人は気の毒だな...この3人に会ったら文句を言われる...)

私はバス停に到着した。丁度2~3分前にバスは行ったばかりだったので、ベンチに座って30分後のバスを待っていた。もう日は落ちて真っ暗、バス停の周りに電灯が付いた。

次のバスがついて中に乗り込み座って外を眺めていたら、登山口から例の4人が下って来るのが見えた。無事らしい。彼らは近くの食堂に入っていったのでホッとした。どんな人でも遭難したり大けがをするのは望まない。

この日けが人を追い越すとき、とても辛い気持ちだったので考えた。今後このような場面に会ったらどうすれば自分の気持ちが楽になるか...？

-----考えた挙句、シップを常備することにした。

私は足を置く場所に気を付けているから、山で怪我したことはなかったが、中高齢者が多い登山道ではまた起こりそうなことだった。足を引きずる人に会ったらシップを渡せばこちらの気分も楽になる。今後自分もけがすることがあれば持っていれば安心...。こうしてシップを常備するようになった。

標高1000m以上の危機意識の違い

あれから半年ほど過ぎた頃、5月の新緑を十分に楽しみ歩いていた。

1日6時間の半分くらい来た辺りで、前を歩いている男性の歩き方が変なのに気が付いた。左脚を引きずり右足に体重をかけて、体が右に傾きながらやっと前へ進んでいる。後ろ姿は相当体力消耗している雰囲気漂っていた。

(この人足をけがしたらしい。この場所では近くの小屋までもかなり距離がある。どこまで行くのか知らないけど、これではもうすぐに歩けなくなる…) 私は100m位ずっと後ろについて歩き様子を見ていたが、周りには誰もいないし1人のようで、足を引きずっているのだからシップも持っていないらしい。

(私のシップが役に立つかも…) 追い抜き際に思い切って声をかけた。

「失礼ですが足が痛むのですか？」ハツとして、大きく頷いた。

年配の男性の顔は疲れ果てて、(よく気が付いてくれた) というようなすがる目をして表情には余裕がなかった。

(ここですぐ休んだほうがいい…) 言おうとしたら、

「みんな同じパーティーだからサっ！」前から大きな声がして見ると6~7m離れた前を歩いていた男が私に叫んでいた。さらにその前には15m程先に男2人いてこちらを振り返っている。その声には(若い女性に仲間の心配なんかされたくないゾ!) というニュアンスが含まれていた。

(またグループ?こんなに憔悴しきっているのに、少し休ませたり荷物持っただけたりすればいいのに。けが人を一番後ろにすると皆についていくのに焦って疲労が増すのに…) 私は叫んだ男を無視して本人に言った。

「シップ持っていますが使いますか？」するとけが人は、

「シップ持ってる！」と自分のリュックを指した。

(??足がそんなに痛いのに持っているシップをしないの???) 叫んだ男が近くに來たらけが人はその男に聞いた。

「やっぱりシップしたほうがいいかなあ。」

(!!!自分の足に聞くのが一番だと思うけど?) 何年も歩いていて、あんなに疲れ果て右側に傾いて歩いている人は見たことがなかった。

標高1000m以上の危機意識のあまりの違いに、私はその場をサッと離れた。

気分を変えて、その日の登山も充分に楽しんで下山した。

後をつけてくる男

5年目になると今後1人登山を楽しむことができるのか少し不安になってきた。登山者のマナーが雑になってきたように感じていた…。すれ違う時に挨拶するのが山でのマナーだが、知らない人がでてきて、私は1か月に2度も知らない男に後をつけられた。

前の前の人鎖場を降りている。待っていたらすぐ前の男が話しかけてきた。

「紅葉があると思ってきたのに全然ないですなあ。終わったんですかねえ？」振り返った目つきが不快な光を放っていた。シルバー世代の男だった。

(この人には気を付けないと…) 直感でそう思った。

「さあ。」目をそらして言うと、

「あれえ？紅葉見に来たんじゃないのお？何しに来たのお？」となれなれしい。(変な奴は無視) 鎖場の人やと降りた。

「先に行く？」と聞くので、

「ええ、すみません。」鎖場の鎖は下りる時に揺れるので、1人づつがマナーだったが、私が鎖場を下り始めたら、その男は間を開けずにすぐおり始めたため鎖は揺れて下り辛かった。落ちてきたら、と思うと危なっかしい。

(危ないなあ！こういう人から早く離れたほうがいい)

降りきった所でスピードを出して歩いた。

「早く歩くと危ないよお～～。」大声で叫んでくる。その後懸命についてくるが、速足で振り切った。

(変なのがいるから気を付けないとね) ベンチで休み水分補給をした。

そろそろ行こうとしたら追いついてきて、また話しかけてきた。

「いやに早いんだよお～。追いつけないじゃないかあ～。」男は私の側に立ってニヤニヤしていた。10年来の知り合いのようななれなれしさに気味が悪くなり、睨みつけて言った。

「何か用ですかっ?!」私は自分でできる最も恐ろしい目つきで睨み続けた。迫力に圧倒されたのか男はブツブツ言いながらそばを離れて先に歩いて行った。男が見えなくなるまで睨みつけていたが、視界から消えたので大きなため息をついて前に向き直った。周りには少し登山者がいたので命の危険はないと判断していた。

その後ベンチから歩き始めたら、さっきの男が待ち伏せしていた。

「やっと来たなあ～。さあ、歩こうランランラン！」私に向かって大声で歌うので、その横をすり抜けた。男は追いかけてきたが、私は100パーセントの力を使って急いだので、相当疲れるのか後ろの足音はいつの間にか消えた。そして2度と会わなかった。

後をつけてくる男-No2

ベンチのある場所を通ったら、座っていた同年代位の若い男が私を凝視した。強い視線に異様な感じがしたので、挨拶もしないで前を通り過ぎた。男は身支度をして、急

いで私の後ろをついてくる。

（なんでついてくる？急いで歩いて振り切らなくては！足音は登山靴の音ではない。山が好きで山を歩きこんでいる人ではない…）山に来てみたら女性がいたから、ちょっと興味を持った、程度のことかもしれない。でも私は後を付けられると、命の危機を警戒し登山を楽しむどころではない。

この足音はなかなか疲れ知らずだった。100パーセントの力を使っても振り切れず、もう1時間以上も10m後を付けられている。

（この男の目的はなんだろう？）命の危険を警戒して強烈なストレスを感じた。他の登山者は少しいたが、そんなに多い日ではなかった。私が少し止まると、後ろの足音も止まる。歩き出すと後ろも歩き出す。

（このままでは疲労しすぎて体力が下山まで持つか…？）と思った。

こうなったら対決するしかない。意を決して立ち止まり、ゆっくりと後ろを向いた。男も立ち止まり、私と目が合うと驚いて横を向き、目を合わせないようにして、視界の端でこちらの様子をうかがっているようだった。

（なんて言おうか…？）男を見ながら考えていたら、男が顔を前にして私を見た。自分をまだ見ていると分かれると慌ててまた横を向き、私と目を合わせないようにしている。

（何やってんだろう…？妙な人だな）サッと観察したら、男の靴は推測通り登山靴ではなかった。それに、悪さをしようとしている雰囲気もなかった。

命の危機はないことが分かれると安心したが、こんなことは気味が悪い。

私は自分でできる最も冷たい声で、道の先を指さして言った。

「お先にどうぞ。」（私を抜いて先に行ってください）という意味。

それだけで男はビクツとしてこちらを見て、

「あ、はぁ…すみません…」と言いながら、小さくなって私の横をすり抜けていった。

全身の緊張が取れてガックリと疲れてしまった。男性にとって軽い気持ちだったとしても、こちらは気味わるくて命の危機すら感じる。

（自分の態度が相手に迷惑にならないか考えて欲しいなあ…）と思った。

「あんたの事いつも見てんだよ！」突然言った知らない男

7年目になる11月下旬の事だった。

その時期は天候が良く毎週登山に行けて気分が良かった。

日が短いので6時に起きて支度をして家を出る。毎週同じ電車に乗り、同じバスに乗って登山道まで行った。それより1本遅いバスだと日暮れまでに下山の余裕はなく、1本早いバスに乗るには5時台に起きないといけない。低血圧気味の私にはそれはできなかった。

その日は少し寒くなるということなので、本格的な冬のフリースをだしてこの冬初めて着て行った。駅から電車で1時間程かかるそのバス停で、イスに座ってバスを待っていた。突然大声がして登山者が何人もそのイスに来た。右隣の人が座らないで周りの人にバスの時間を聞いている。落ち着きのない大声を出していた。

そのうちその男がジロジロと私を見下ろしている。

(嫌な感じ…) 気味が悪くなり帽子を深くかぶりなおして、顔を男から見えないようにした。バスが来るまでまだ2～3分はあった。

すると、男がおもむろに話しかけてきた。

「アンタさあ～、いつも〇〇駅から乗ってくんだろ?アンタの事ずっと前から知ってたよ!!」 (!!) 心臓が止まりそうになった。それは私の利用している最寄り駅だった!

(ずっと前からだって?) 私はまだ前を向いていて、動揺しながらも自分に話しかけているとは知らない振りをした。

(しらを切るしかない…) うつむいて時計を見て、全く気が付かない振りをした。男はまだしつこく話しかけてきた。

「あれえ～?聞こえないのお～?」と、私の顔の前に手を持ってきて振った。

(しつこいな) 私は意を決して男を見上げた。

「アンタさあ～〇〇駅から乗ってくんだろ～?ずっと前からいつも見てんだよ、アンタの事!!なあ～そうだろう～?アンタの事知ってたよお～!!」

(なれなれしい…うっとおしい…!) 私は自分でできる最も恐ろしい形相でにらみつけ、大声で言い放った。

「そんなの知りませんよっ!!」周りの人たちが驚いてその男を見た。

男は私の迫力と周りの視線にたじろいで、

「いや…いい…」と言って横を向いた。…はあ～、緊張した…

私はたとえ同じ人を見たとしても、なれなれしく話しかけたりしない。そんなこと言われて、相手が嫌な気分にならないか、それくらい考えられないのかね?と思った。

私は今日初めて冬のフリースを着ている。今迄は別の服装だった。地味な中年男性風の服装をして目立たないように注意しているのに。

(ずっと前からいつも見ている？知っているって何を知っているのか？最寄駅から1時間ほどあるこのバス停で…) 動揺はなかなか収まらなかった。
今日登山に行っても大丈夫か不安になった。

その時バスが来て乗った。周りの登山者もその男も。
(バス停で降りたら、男がどこに行くのか観察しよう) そして7年目になる1人登山を振り返った。同じ時間の電車・バスに乗り、だいたい同じコースを歩けば同じように毎週来ている人と同じになっているのかもしれないが、私はほとんど人は見ていない。誰が同じ電車・バスでも気にならないし知らない。静かならそれでいい。

去年の冬も毎週同じコースを歩いていたら、
「この前もここ歩いていたでしょ？」と全く人のいない登山道で男に聞かれたことがあった。

「そんなの知りませんよ！」冷たく言い放ち、絶対に知らないふりをしてその場をすぐに離れる。女性1人登山では最も危険なのは人(特に男性)だという初心は忘れない。同じコースを歩いている女性、となると、待ち伏せなど避けたい事が起きる可能性がある。

登山道のバス停に到着すると数人の登山者が降りた。男の気配をうかがったが、私とはまるで違う方向へ歩いて行った。

(良かった…偶然最寄り駅が同じか近くというだけか…人騒がせな…)
安心して登山に行った。1日中その男に会うことは無かった。
しかし、私はその後何週間か登山を休んだ。

山中での怖い体験

その後3週間して私はまた登山に出掛けた。
晴れているのに3週間も登山に行かないのはかなりの忍耐が必要だった。これだけ休んだからもうあの男には会わないだろう...と思っていた。最寄駅から電車に乗った時、なんとなく緊張して車内を見回した。自分の知らないところで、誰かに見られているのは不安だった。その時は私をジロジロ見ている人も、登山の格好をしている人もいなかった。...少し安心...

1時間以上乗って例のバス停に行きバスを待ち…バスが来て乗ったが何も起こらなか

った。…良かった…！

私は嬉々として山へ入っていった。

久しぶりの登山はとても清々しく、風の音、葉の音が心地よく、木漏れ日が温かい。自分の心の故郷に帰ってきたような居心地の良さ…。豊かな自然に包まれて心は洗われ、登山の楽しさを満喫していた。

頂上に着き、壮大で美しい富士山を正面にお昼にしたら、すっかりご機嫌で嫌な事すべて忘れていた…。

（やっぱり山はいいなあ～♪大自然ありがとう～♪）気分が良くなると、自然にお礼を言うのがくせになっている。充分清々しさを満喫して下山し始めた。

半分ほど下っただろうか… 背後から足音がした。

その足音は登山道を歩き込んでいる人のものではない。

無駄な力が入っている雑な足音で気配も荒い。その歩き方から出る大きな足音を、これ以上聞きたくない、と感じた。

（先に行かせよう…）道端に避けた。

その男は追い抜き際に挨拶してきた。

「ちわあ～！」無視はできず、顔を前に向けたまま言った。

「こんにちは」その声に反応して突然立ち止まり、ジロジロと私の顔を覗き込んでから言った。

「アンタさあ～登って来る時、大倉尾根から来ただろう～?!そうだろう～?!」私は全身の血が逆流するように感じた。それは私の登った登山道だった。

（たまたま同じ道だったか？後を付けたか？…なれなれしい…3週間前にバス停で話しかけてきたのと同じ人か…？）

ここは誰もいない登山道。12月の下旬で山全体に登山者は少なく、ここを1時間歩いているが誰にもまだ会っていなかった。男は60代に見えるが対決したらひとひねりで倒せる様子ではない。私は身の危険を感じた。絶対に答えたくなかった。心臓が破裂しそうに鳴りながらにらみつけ、

「なんでそんな事聞くんですか？」冷たく言い放った。それがその時にできる精一杯の態度だった。男はムツとして、

「なんでって、ただ知りたいだけよお～。なあ～あの道だろお～？そうだろお～～??」しつこく聞いてくる。

（うるさいな、先に行こうか…？）でも3週間もブランクがあるから急いでケガでもしたら、その時こそ困る。ここで先に行かせるしかない。

（これ以上絶対に口を利かない！）と決心し、男の言うことを無視して顔を前に向けた。さらに視界の端に男に気を集中させて何か不審な動きがあったら（即刻ケリを入れるか、この登山用の杖の先端で突く！）右手で杖を握りなおした。

男はなれなれしく話しては私をジッと見ているが、絶対に口を利かないことが分かったらしい。

「アンタ、相当変わってんなっ!!!」囁みつくように男は言った。私は冷たく睨みつけた。

（変わってんのはそっち！道を避けてなのにサッサと行かないでなれなれしい。でも決して何も言い返してはいけない…）

まったく相手にしないことが分かると、男は諦めて下山し始めた。

（これでいい…。去っていった…。…このまま下ったらどこかで待ち伏せされているだろうか？）まだ緊張は取れなかった。他の道を行きたかったが、また登って別の道を行くとしたら日暮れには下山できない。

私は去っていく後ろ姿を見えなくなるまで確認していた。その後ろ姿の雰囲気は後ろに何も興味が無いサバサバしたものだった。

（これなら大丈夫…）警戒心は解かないで歩き始めた。ずっと歩いても、もう会うことはなく、無事バス停にたどり着いた。ドッと疲れが出た。

（気軽になれなれしく聞いてくることは、本当にやめてほしい…）

1人登山はこういった意味でも精神修行のよう。

私はついに、しばらく登山を休むことに決めた。

茂み男

冬の低山ハイクの下山時に登山道でうろうろしている中年女性がいた。なんとなく嫌な感じがしたら彼女は私を見つけると走り寄ってきた。

「あのお～すみません。ちり紙ありますか？」（なんだ、そんな事か...）

「ええ、持っています。」安心してリュックを下ろして出している間、彼女はもじもじと話し出した...

「あのお～主人がちょっと...もよおしまして...今あそこにいるんですけどお～。」茂みを指さす。（えっ?!聞きたくない!）

「朝ちゃんとしてきたのに、こんな所で困るんですよお～。」

（困るのは聞いているこっち!説明しなくてもいいのに...）

「お～い!まだかあ～～～?」茂みからタイミングよく男の声がした。

「今もらっているところよお～。（私を見て）ど～もすみません...。」

出して全部渡すと、

「あ、1～2枚でいいですう～。」足りるとは思えないので全部渡した。

「すみませ～ん。ありがとうございます。彼女」彼女の声を後ろに素早く歩き始めた。後ろの茂みで

「もらったよ～!」

「まったく待たせるなよ～!寒いんだよお～!」文句を言う夫の声がした。

（ヤレヤレ、登山気分が台無し...）こういうことに遭遇したくないけど、なぜかしばらく可笑しかった。

登山道で大をしている男に遭遇。その後...!!

1人登山を始めて4年目の冬山だった。毎年雪が降り積もり凍り付き、1000m以上の登山道は滑りそうで用心していた。アイゼンは常に持っていたが、着脱が面倒でなんとなく避けてしまい、いつも歩き易い登山道のすぐ脇のまだ踏み固められていない雪の上を歩いた。

その日もそうして歩き、あと50mほどで頂上という地点に差しかかった時、登山道に沿ってしゃがんでいる男が目に入った。山には自然の写真を撮っている人が時々いるので、そんな格好でも不審に思わず、何を撮っているのか挨拶代わりに聞いてみようと思っていた。

あと4mほどに近づくとおしりを出しているのが見えて...！

突然の事態に頭は真っ白（まさか露出狂？）と思ったが、全く動く気配がない。あまりの驚きに立ち止まることもできず、サッと目をそらして知らない振りをして、狭い道の男の目の前1m位の所を歩いてきた速度で通り過ぎるのがやっとだった...

男は私を見て、

「っちえ！」舌打ちし

「ったくよお～！ぶつぶつ...！」と文句を言った。

（登山道のこんな所で大なんかしらないで！なんで文句言うの？）

速足で頂上に向かった。

頂上は清々しい冬晴れで青い空に素晴らしい景色、何人かの登山者がくつろいでいて、動揺が落ち着くまでに時間はかからなかった。富士山が大きく見えるいつもの場所に座り、

（あれは夢だった...）と思うことにして、お昼にした。

（頂上でのおにぎりは美味しいー！）と、楽しんでいたら...

左端の茂みからさっきの男が出てきた。紺色の上着が同じですぐに分かった。

（...済んだ...？）

途端に怖くなったけど、私はさっきは登りで暑いので、薄茶色の服で帽子をかぶっていなかったが、今は寒くグレーの厚手の服に帽子をかぶっている。同一人物と分からないはず...

男は私の目の前を通り過ぎ、女性に話しかけている。夫婦らしい。それならもっと安心...。おにぎりの続きを食べ始めた...

ところが数分すると夫婦で話していた男が突然私に向かって歩いてくる。

（何？逃げたほうがいい？）荷物を急いでまとめているうちに側に来てしまった！

（！！！！）緊張は頂点に達した。

「ちょっとすみません。下のバス停まで行く一番近い登山道はわかりますか？」

（なーんだ...！）一気に緊張はほぐれた。

（そういえば、なんで私が逃げないといけない...？何も悪いことしていない）

話していて分かった。彼らは別のルートで頂上に来て、男は誰もいないと思って茂みに入ったが、そこには彼の知らない登山道があった。しかも私が同一人物だとは分かっていない様子で、さっきの事は全くなかったかのような温和な中年男性だった。安心し

て私がさっき来た道を教えると、妻も聞いている。分からないようなので標識まで連れて行って説明すると、2人ともお礼を言い、その道を下って行った。

(何事も無くて良かった…。でもあの地点になったら、ここで自分が非常識な事をしたと知るだろうね…。そのことを奥さんに言うのかな?) と思った。

(それにしても人間は分からない。あんなに温厚な雰囲気の人が、発見時には文句を言うなんて…。それにこの間の茂み男もそうだけど、これが町だったらちゃんと我慢するだろうに、山ではどこでもOKと思うのかな?)

この珍しい体験も山ならではだったが、もう2度とこういうことには遭いたくない…。

標高高い場所で休憩に座った岩は…？

登山2年目の冬だった。

雪が降り積もり凍って、1000m以上はとても歩き辛かった。登山道のすぐ脇をずっと歩いていて、温かいお茶を飲みたくなった。どこか休める場所はないか探してみた。一面雪なので雪の上には座れない。適当な岩か切り株…。

少し離れた場所に座るのにちょうどいい小さな岩が見えた。近くに行くと崖の近くで見晴らしは抜群。座ってみると丁度1人分の椅子のようだった。

(こんなに景色の良い場所に休める岩があるなんて良かった…)

ポットを取り出し、熱いお茶を飲んだ。

雪化粧した山々は美しく、この辺りすべてが見渡せるこの場所がすっかり気に入った。

(良い休憩場所を見つけたから、来るたびにここで休もう…)

登山道から離れたここに座っていると、誰も来ない安心感も手伝ってリラックスしていた。しばらくすると、ここの登山道はほとんど土で岩は無かったことを思い出した。

(…こんな岩がどうして見晴らしの良い場所にあるのかな？向こうの尾根は岩だらけだけど、ここの周りは土ばかりだった…) 急に不思議になった。今は一面雪だから確かめられないけど、何度も通って知っている…。

(えっ？なんで岩があるの？どういう地形？) 体半分ずらして座っていた岩を見つめた私は、飛び上がった!!

"OO君、景色の良い場所で静かに眠って下さい..." どなたかの墓標!!

「すみません！知りませんでした!!許してください!!座るなんて失礼なこととして許してくださいっ!!」謝罪の言葉を何度も口走りながら、荷物をまとめて走り出した。1回だけ後ろを振り返り、

「もう2度と来ません！邪魔しません！すみませんでした!!」叫んだ。

登山道に戻ると、そのまま頂上に駆け上がった。

やはりあの地形に岩は不自然、見つけた時に気が付けばよかった。

このコースに慣れてきていたが、身の引き締まる思いがした。

「山では常に隣に死がある」このことを、慣れてきても決して忘れないようにしよう。

今迄も気を付けすぎるくらいだったが、さらに心に誓った。

猛スピードで突然目の前に現れた物体…

2年目の冬山での事だった。

いつものように大倉から三の塔への登りを登っていた。

天気は良く木漏れ日が気持ちが良い。風が強く周りの木はサワサワと音を立てていた。まるで煩悶を拭い去ってくれるようで心がスッキリとしてくる。

（やっぱり山に来て良かった…）歩き出すといつもそう思う。

自然の香り・音・空気を楽しみながら、日常の何かを思い出していた。

歩き始めて40分、狭い登山道で勾配がきつく、カーブが頻繁になる辺りで足元に注意して登っていた。

突然ザザッ!!と大きな音がして、目の前に巨大な何かがすさまじいスピードで現れた。あまりにも突然の事で何か分からず、とっさに

（鹿が走ってきた?!相手が止まらなかつたら追突される!!）

物体は目の前2m程で止まったが、恐怖で硬直し、目で見ているはずなのに見えず、何か判断ができなかった…。

「すみません…」男性の声がした。（人間…？）

少しホッとしたり、マウンテンバイクから今降りた男が見えた。

（心臓が止まるかと思った…）我に返り、大きなため息とともに、

「鹿かと思った…」つぶやくと「すみません…」小さな声ですまなそうに詫びて、小さくなってマウンテンバイクと共に私の横をすり抜けていった。

（私は遠くからマウンテンバイクが来るのが分からなかった…？おかしいな…？）こちらが先に危険が分かればもっと良いのだから…。

その麓では冬になると、マウンテンバイクが同じ道を通ることを知らなかった。木々や風の音で分かりにくかった。

それ以来その登山道ではマウンテンバイクの音にも気を付けるようにした。その後何度か彼らに会ったが、彼らのほうが気を付けてあのようなスピードは出さないし、私（登山者）を発見したらすぐ降りて、

「こんにちは！」と明るく挨拶をして通り過ぎるから大変ありがたい。

私も音が分かるようになり、すぐに道をあけるようにした。

銃を構えた3人の狩人に遭遇

これは登山の中で、最も恐ろしい体験だった。

秋も深まり、山はそろそろ冬になる11月の出来事だった。

大倉から三の塔の登山道の麓のほうでは秋から冬の終わりまでが狩りのシーズンらしく、時々猟犬をつれ銃を持った男達に出会ってしまう。初めてバツタリと登山道で会ってしまった時はとても緊張したが、元気を出して明るく

「こんにちは！」と、挨拶すると、

「おっ！頂上まで行くのかい？若いモンは違うねえ！たいしたもんだ！」笑顔のおじさんが明るく言い、全く狩りにしか興味が無い様子に心底ホッとした。でも、誰もいない山道であの銃を向けられて「金を出せ」となったら…と思うと恐ろしくなり、以来警戒するようになった。

怖ければそのコースの登山を止めればいいのだけど、冬の間気に入ったそのコースをどうしても歩きたかったし、毎回会うわけでもなかった。

以来遠くからのすべての音に神経を研ぎ澄ましていった。

人が歩く音、何人…？ 2人の登山者の中年男性…次の音は…？ 人と犬の足音…何頭いる…？…3頭くらい…。

それはたいてい分かるようになっていき…狩人たちには気合を入れて、登山者に会う時よりも元気に挨拶した。ほとんどの狩人は陽気なおじさんで、

「頑張るねえー！根性あるなあ～！」などと明るいので救われた。

その日は三の塔から大倉まで下っていた時だった。もう10分で登山道から舗装道路に出る辺りに差し掛かった時、狩りの音がした…。

獣の走る音と狩人たちの声、犬の走る音…。これらは登山道から少し離れた場所で起こっていた。こういうことも時々あって気分は良くないけど、登山道に向けて撃つことはないし、警戒しながら足早に通り過ぎれば会うことは無い。速足で歩いていたら、すべての音が少し遠くなった。

（あと5分で登山道が終わる。もう大丈夫…）気を抜いたその時、突然目の前5m程の場所に、凄まじい勢いでザッと雌鹿と子鹿が右の茂みから出てきた…！あまりの事に驚いて硬直し、目を見開いて彼らを見た。

彼らは一瞬止まって私を見た。私が狩人たちの仲間か、危険人物かどうか、えぐるような視線だった。

私は驚愕の目で雌鹿の目を見ていた…。

雌鹿はすぐにひらりと向きを変えて左側に走っていき子鹿も後に続き、そのすぐ後に「ガウガウウウ！」と猟犬が吠えながら数匹、目の前を右から左へ走っていった…。

次に右の茂みから出てきたのは、銃を構え今すぐ撃てる体勢に腰を低くしながら前進してくる3人の狩人たちだった…!!

それを見たときたん頭は真っ白、心臓は飛び出るように鳴り、目の前が真っ暗になっていく…3人の狩人のこちら側の1人がゆっくりと私を見た…!

（ここで死ぬ…？）全身の血が逆流しているようで、目はあいているのに目の前は黒く見えなくなっていく…そのまま視界が無くなっていった…

その後すぐ、耳元で大きな銃声は何発もした。

自分が生きているのか、死んだのか、立っているのか、全く分からなかった…。

左側で狩人たちと犬の鳴き声、色々な走る音がした。

ハッと気が付くと、さっきと同じように登山道に立っていた…。

（はぁ…生きていたのか…早く山を出なければ…）歩こうとしたら足に力が入らなくて転びそうになったが必死に歩き、バス停にたどり着くとグッタリしてしまった。

もちろん狩人たちは鹿が目的だから人は撃たない…（撃ったら犯罪）

でも出会った時、私は恐怖で硬直し視界すら無くなり、すべての感覚が飛んでしまった…。

あまりに恐ろしく、春になるまでそのコースの登山は2度とできなかった。

日本に普通に生きていたら、銃の恐怖を感じることはない…。でも戦場だったら…？銃を向けられた恐怖は計り知れない。

それに鹿の目…あんな目で見られて、色々な事を考えさせられた。

狩人たちは生命の危機から必死に逃げる鹿の目を見たことがないのか…？

えぐるような視線の中に、凜とした強さのある野生の輝き…。

それが痛いほど伝わってきた。

以前読んだ本を思い出す。私の好きな話で、オーストラリア人のマイケル・J・ローズが書いた「魂との対話」

彼は農場を経営し家畜を飼っていたが、野生のワラビーが彼の農場に入り込み牧草を食べてしまい、いつも赤字だった。仕方なく夜行性の彼らを毎夜見回り銃で始末していた。気が重かったが、そうしないと農場は荒らされて困窮し彼らが生きていけない。

ある夜、車のライトに照らされたワラビーと目が合った時、彼は素晴らしい野生の魂を見せられたように心打たれてしまい、（もうやめよう）と決心する。その代り彼はワラビーと協定を結ぼうと、丘の上から大声でその内容を農場の周りに向かって伝えた。「ワラビー！この農場の草を食べないで欲しい！その代り君たちを撃たないと約束する！この土地は君たちと共有するのだから、牧場の外は自由に食べてもいい！境界線20m以上内側に入らないで欲しい!!」そうしたら、その協定は守られ、たった2～3週間で牧草の草は急速に成長し、彼らの家畜は増えて生活は改善された。

…これはすぐには信じられない特別な話かもしれない。でも、彼がワラビーに銃を向けるのを止めると決心した気持ちが、鹿に見られてよく理解できた。

雷と大雨に追いかけて…

登山で気を付けていることの中に、天候の急激な変化がある。下の街では晴れでも標高1000m以上になると天候は変化しやすく、基本的に不安定だと思っている。毎日天気予報をよく見ているので登山中も天候が不安定にならないか注意している。

その日は登山2年目の新緑の頃だった。みずみずしい空気に木漏れ日がさわやかで、身も心もリフレッシュして元気に歩いていた。快晴で新緑が目美しく映え、野鳥の声が優しい。木々の葉が風になびき心地よい音を立てている。すべてが自然からの称賛であるかのように感じられ、おもわず自然に対して感謝の言葉が出てくる…。

「いつも素晴らしい自然をありがとう…。」三の塔から烏尾山の道を歩いている時に、塔の岳の向こう側から突然黒雲が出てきた。

（これは塔の岳までは行けないかな…。下山できる最後の分岐点は烏尾山であと30分。そこまで行って判断しよう。）と思った。

30分の間に、黒雲の広がりには普通では考えられないくらい早くこちらに広がって来る。空気も湿ってきた。烏尾山に到着し、すぐにベンチでリュックからレインコートを出している数分の間にも、黒雲が真上まで来てゴロゴロと雷が鳴った。

（早く下山したほうがいい！）烏尾山からの下山のルートは今迄歩いたことがなかったが、早く下山しないと危険なので行くしかない。

（とにかく早く下山しないと！）レインコートを羽織ったまま、ファスナーを閉める余

裕もレインコートのズボンをはく余裕も無く、急いで麓に下り始めた。その時、突然大粒の雨が叩きつけるように降り始め”ピカッ！”辺り一面真っ白に光ったかと思うと、バリバリバリッ！ガラガラガラッ！

凄まじい勢いで私は飛び上がった！町で体験していた雷雨など雷雨のうちに入らないくらい、天が割れて頭の上から大きな岩でも落ちてくるかの勢いで、まるで天が怒り狂っているようだ。

辺り一面真っ白になったかと思うと凄まじい勢いで音がする、こんなに頭上近くで凄まじい雷雨は体験したことがなかった。

「急がなければ…でも落ち着いて…ここは木が多いから雷は落ちないし大雨もすぐ小雨になるから…登山道のテープはここ、次はここ…」声を出して初めての登山道の目印のテープを目で追いながら、自分に言い聞かせた。

私は初めての登山道に緊張し、ここまで急激な天候の変化に緊張していた。初めて歩く登山道が、こんなに切羽詰まっているとは…。

初めての道で焦ると迷う可能性があり、迷ったら遭難の危険がある。

雷は頭上で光り、辺り一面真っ白にして凄まじい勢いで鳴り響き、まるで天が割れて落ちてくる勢いだった。雷が鳴る度に衝撃的な音に飛び上がってしまい、足元がぐらついて転びそうになる。自然の恐怖を見せつけられるようで心底恐ろしく、下界に対して天が怒り狂っているように感じた。

「こういう時こそ気を付けて！道の続きはここ？今度はあっち！落ち着いてちゃんと確認しないと！」声に出しながら、泥の斜面で滑りそうな道を、気を付けながらも小走りに下っていった。

…そのうち雷は小さくなり、雨も小降りになってきた…。

登山道を抜けて、舗装道路についた。ここまでくれば大丈夫。

腕時計を見ると標高800mの表示だった。気圧で測るため正確な標高ではないにしても、烏尾山は1136m、わずか300mの違いでここは静かで快晴だった。

（山ってハードだなあ！）私は狐につままれたような気分で羽織っていたレインコートをリュックにしまった。レインコートのズボンをはいていなかったのので着ている登山用ズボンがずぶぬれ状態、泥ハネもあった。レインコートのフードをかぶったはずが、途中で脱げたのか頭の髪の毛からは雨水がしたたり落ちている。タオルで拭きながら、

（自分の身を一刻も早く安全な場所に移動させるのが最も大事。命の安全第一。自分は良い選択をした。）と満足し、落ち着いてそのままバス停まで下って行った…。

大倉のバス停の周りは大きな美しい市民公園で、キレイに花が植えられていつも整備されている。清潔・キレイな広い公園で、家族連れや洋服を着せた子犬の散歩の人たちが、おしゃれをして遊びに来ている。バス停までの大きな橋を渡って通り抜ける時、人々が驚いて私を見た。

ここでは雨の降った形跡もなく、人は傘さえも持っていなかった。そこに泥ハネしてほとんど雨にぬれたズボンに頭までぬれた私が山から歩いてくるので、珍しい野生生物が山から出てきたかのように、たじろいでザザッと端に避けながらジロジロと見ていた。命の危機を感じて必死に下山したので、ただならぬ雰囲気もあったのかもしれない。

それを見た私は少し愉快的気分になっていた…！

こういった経験もなかなかできるものではない。

(このことはシッカリ覚えておこう…)

そしてたとえ普通と違う人がいたとしても、ジロジロ見ないようにしようと改めて思った。外見だけキレイにして人と同じように毎日暮らしていると、分からないことが沢山ある。

雷の恐ろしさは天が怒っているような凄まじさ!!

自然の厳しさを改めて感じる貴重な体験をした。

初めての道でも迷わずに降りてこれて、自分の判断は良かった。

いつも下山するとバス停で山々を見てお礼を言う。今日の感謝の言葉は、
「あのような状況でも無事に帰してくれて、ありがとうございました。今後も命を大切に無理しないようにします。そしてまた楽しみに来ます♪」

地上1.5mの目の前の高さを、人の足が横切っていく…

大山は山岳信仰でも知られて神社や御堂もあり、ケーブルできてお参りだけする人も多い。小さな滝がある近くの小さな御堂が祭ってある場所は、あまり好きではない場所…。いつも日陰で湿気が多く、神社独特の赤に白の文字が入った大きな旗が幾つも立てられている。ここを通る時、魑魅魍魎（ちみもうりょう）などいないと思うが、目に見えない何かがいるような気がして不安になる。

「神社は良いものなのだから。」自分に言い聞かせて、サッサと小走りに通り抜ける1人登山初めての年。

幾つも台風が来たあと晴れが続いて、嬉々として登山に出掛けた。大雨の後山を歩くのが好きなのは、フィトンチット（葉から出ている人に有効な成分）が多く出ている感じでリラックスできるから。土の香りも普段より強くなる。その日も山全体がリフレッシュしたかのような新鮮な雰囲気、日の当たっている場所は明るく、木漏れ日がとても気持ち良い。台風の後で時々道が崩れている場所があったが歩けないほどではなく、穏やかな気分で登山を楽しんでいた。

帰り道で日陰の暗い道を歩かなければならないあの場所がある。日中なのに暗く、時々カケスの「ギャー!!」という鳴き声も聞こえる。心細くなりながら速足で歩いたら、例の神社の小さな御堂近くに来た。

（ここが一番苦手…何か出そう…早く過ぎよう…）御堂の前を通り過ぎようとした時、目の前を、人の足（足先とスネ、ひざのあたり）が右から左にゆっくりと通っていく…！地上150cm以上ある目の前を…？

一瞬何が起こったか分からなかった!!

（ついにお化けが出た…!?!? 自分はどうなる…?)

「こんにちは～！」突然明るい声がした。

（生きている人?!）たじろいでもっと上を見上げると、そこには作業服を着た青年の爽やかな笑顔があった。

落ち着いてよく見ると、これは地上150cm程の位置に、登山道をまたいで短いレールを設置して、神社の御堂の周りの崩れた土砂を右から左へ猫車で持っていき、捨てる作業をしていた。捨ててはまた右の御堂へ帰るので、その青年の地下足袋の足は再び私の目の前を通り、

「通ってもいいですよ～」と、固まって動けない私に、再び笑顔で明るく声をかけてきた。

「はあ、どうも…。」そのレールをくぐりぬけ右側を見ると、もう1人中年男性が作業していた。

「崩れたのを直しているのですか？」聞いてみた。

「ひどい土砂でねえ～。最近台風ばかりだったし、なかなか大変だよ～。」作業服の男性は笑顔で言った。その明るさにホッとして、

「ここにいつもレールは無かったから驚きました。お化けが出たかと思った…。」思わず言うと、2人の作業員は楽しそうに明るく声を出して笑った。

この暗い場所で人に会うことはほとんどなかったが、2人の明るさは、ここの暗さと対照的だった。

「気を付けて…。」2人は、歩き始めた私に声をかけてくれた。

「ありがとうございます。」さっきとは一転して、気分はとても爽やかだった。

日本語に驚いたスコットランド人夫妻

時々この登山道で外国人に会うことがある。

外国人に会っても、日本人にするように「こんにちは」と挨拶してきたが、（この山に来るのはどこの国の人？どうやってこの登山道を知ったのかな？安全で話し易そうな人がいたら聞いてみよう）と、思っていた。

私が外国の山や森に行った時、その国の人々が挨拶や話しかけてくれることは嬉しい。現地の言葉で話してくる人にも会ってきた。

（ここは日本だから日本語で話しかけて、通じなかったら英語にしよう）と思っていた。

3月の温かくなってきた頃、私は一通り登山を楽しみ、塔の岳から大倉尾根を下山中だった。人の気配がして、登ってきたのは熟年の外国人夫妻で普通に声をかけた。

「こんにちは。」

2人共少しはにかんだように微笑んで「コンニチハ。」と答えた。

感じの良い笑顔で話してみたくなった。すれ違った後思い切って聞いた。

「どこの国から来ましたか？」...お2人共私をジッと凝視している...

もう一度同じ質問をしたけど見ているだけなので、英語で同じ質問をした。笑顔がパツと輝き「Oh!Ha~!!」安心感からくる大きな息をして、

「スコットランド！」と言った。

「遠いですね...」

「今日は天気が良くてハイキングに良い日ね！」夫人は明るく言葉を続けた。

「ええ」につこりすると、夫が自分の着ているTシャツをバタバタさせて、日本語で、

「アツい！アツい！Hot!」と楽しそうに言う。

不意に出た日本語に思わず微笑んで

「ええ、暑いですね！」私も日本語で答えた。

「今日中に塔の岳山頂に行きますか？」と聞いてみると、頷く。

「それからどこにいくのですか？」この質問に2人で顔を見合わせて思い出そうとしているが、すぐに思い出せない様子...山の名前を幾つか言ってみると、丹沢山で頷いた。

「知ってる。良い登山道です。」と言うと微笑んだ。

「ハイキング楽しんで！」と言うと「サンキュー！」私たちは笑顔で手を振って別れた

私が日本の登山道で英語を話したのはこの時が初めてだった。真のバイリンガルはいつでもどこでも話せると思うけど、私は語学留学も英会話学校にも通った経験はなく、聞き流すだけの教材で身につけたものなので、常に流暢に話せるものではない。外国に行った時の日常会話や、同じ趣味や考えを持った人たちと話す事は好きで、外国に行った初日はあまり出てこないけどそのうち慣れて出てくるようになる。

(なんとか会話できて良かった!) 穏やかで感じの良いご夫妻と気に入っている登山道で話ができるととても嬉しかった。すぐ後で、

(この登山道をどのようにして知ったのか聞き忘れた~!) と、思った。

外国では原語で話しかけてくる人によく会った。フィンランドでは中年以上で英語ができない方々。私は少ししかフィンランド語を知らないけど、不思議な事に全体で何を言っているのか分かることが多い。スペインでもイタリアでもそうだった。コミュニケーションでの言葉の占める割合は少なく、表情や態度 "気" で伝わっていることも多い気がする。

陽気なイタリア人青年

あのスコットランド夫妻の半年ほど後の出来事…。

他の外国人にも会ったが、挨拶する程度で話をする機会がなかった。

その日も一通り登山を楽しんで下山していた時、後ろから英語の声が聞こえたので、先に行ってもらおうと道を避けた。通り抜けたのは中年の日本人男性と外人青年で、青年は振り返り立ち止まって笑顔で私を見ている。2人連れで、この登山道は人通りがあるから話しても問題はない、と思い、最初日本語で質問したけど分からないようなので英語で聞いてみた。

「どこの国から来ましたか？」

「イタリア! あなたはどこの国から来ましたか？」すぐに同じ質問をされた。(??何かのジョーク?) 答えに戸惑っていたら、

「韓国人?」次の質問で、(日本に来た韓国人だと思っている!)

「違う、日本人です」答えると、笑顔で言った。

「ジャパニーズガール、プリチー、ね!」思わず笑ってしまった。ガールって年でもな

いけど、イタリア人は女性を褒めるのが挨拶代わり…？

イタリアなら行ったことがある。一緒に下山しながら話した。

「あなたの国に行ったことがあります。」

「うちはフィレンツェ。来たの？」英語がとてもたどたどしい。単語を1つ1つ区切って話す。私も人の事はいえないが青年はかなり苦手なようだった。

「ええ、古い歴史のあるとても美しい街だった。」

「ジャパニーズ、タクサン、クル、ジャパニーズ、オモウ、キレイ～！カンバック、ノウ！」少しの英語と日本語を織り交ぜて、繰り返し言う。

（日本人はたくさん私たちの町に来て、美しい！と思って日本に帰りたくなる）と言う意味らしい。

10年程前にイタリアに行った時、イタリア語少しと歌を原語で覚えていた。行った時は旅行イタリア語を少し使っただけで歌は歌う機会は無かったので、突然披露したくなった。

「イタリア語で歌を歌えるよ。」と言うと驚いたように立ち止まった。

歌い易く簡単な曲“砂に消えた涙”を歌い始めた。青年はしばらく聞いていて「ミーナ！」と言った。歌っていた人の名前だった。

「イタリア語どれくらい勉強した？」

「1か月くらい。」

「イタリア語話せる？」…思い出せたのは単語1つだけだった。

「ウンポ！」（“少し”の意味）笑ってしまったら、青年も笑っている。それくらいしか思い出せないのは充分伝わったらしい。

もう1曲歌おうと“ボラーレ”を歌い始めた。青年の顔が驚きの表情に変わった。これは早口で単語をたくさん言わなければならない歌で、当時2番まで正確に歌えるように練習していた。

青年は勢い付いて早口のイタリア語で私に話しかけてくる…。

（Rの発音が英語より強いんだったなあ…）などと思いながら続けた。

連れの日本人中年男性は前を歩きずっと黙ったままだったが、突然振り返り

「きれいな歌だ…」と、言った。

青年が早口のイタリア語でまだ話してくるので歌うのを止めた。

青年のイタリア語は分からないけど、全体としてとても褒めてくれているのは分かった。青年は、自分がイタリア語で話していることにハッと気が付き、突然黙り込み…また、ゆっくりと単語を区切って話し始めた。

「ユー、カンターレ、ベリー、グッド！ユー、ウタ、ベリーウエル！」

英語・伊語・日本語混合だったが、何度も言ってくれて嬉しかった。

「ユー、イミ？」と、頭を指した。（この歌の意味を知っている？）ということらしい。NHKイタリア語講座のテキストに歌詞の意味が載っていた。

「知ってる。とても良い曲。」答えると、目を見開いてまたイタリア語で何か言った。（ネイティブの人が私の歌を喜んでくれて最高!!）心一杯に温かな気持ちが広がった。

旅行に行った時、一生懸命覚えた歌を現地の人達の前で歌えなかった。それが時を経て自分の気持ちが整った時に、ちゃんと生かせる場が来た。しかも日本で。…人生は不思議で神秘的…！

今ではフィンランドで数えきれないくらい現地の人たちに原語の歌を歌ってきたし、英語圏でも歌っていたから、人前で原語で歌うことにためらいはなかった。ただ、イタリア語でイタリア人の前で歌うことは人生初めてで、言葉忘れているかも？と、思ったので、覚えていた良かった。

一通りこの話題が収まったら、お互いの事を聞き、話した。それによると、青年は建築デザイナーで、日本人女性と結婚して式を挙げる目的で、日本に2か月の滞在をしていた。その期間北海道から九州の大きな山に登山する計画を立てて北海道は済んで今は関東。イタリアではあまり登山をしなかったけど、日本での登山は気に入っているらしい。

「この登山道は初めてだけこの間隣の山に登ったよ。」鍋割山[1272.5m]の方を指さした。

（外人向けの本がでてきているのかな？）聞こうとしたら、

「あなたはどこに行ってきた？」と聞かれたので、

「三の塔からこっち。」と指さした。

青年は全部日本語で話すのも理解するのも難しく、英語だと聞くのは分かるけど、話すのが難しいらしい。ゼスチャーと単語を区切ったものを並べるように答える。それでも言いたいことはよく分かった。

若者でここまで英語が話せない外国人と話したことは無かったので、内心驚きながらも青年を興味深く観察していた。英語を話さない人はたくさんいて、自国から出なければ必要ないと思うけど、

（外国に行くのだから日常会話くらい話せるように）と思わなかったのかな？…でもよ

く考えたら、日本人女性と結婚したばかり。青年の話では今後1年に2か月は日本に来て、残り10か月はイタリアで住むらしい。それならイタリア語と日本語ができれば困らないことになる。青年にとって英語はそんなに重要ではない様子だった。日本語も妻から自然に覚えていける…。

私は自分の英語が通じない時、分からないと言われた時など、「まだまだ足りないのかあ。」と、気分が下がってしまう。↓
青年を見ていると、そんなことは気にしなくてもいいのかもしれない。と、思えてきた。話したければ楽しく話せば良いみたい♪

青年は黙っていることがないくらいおしゃべりだった。「東京の物価は高くて困る、特に果物！フィレンツェではかご一杯に買える同じ値段で1つしか買えないよ～！こんな高いと今後生活できないよ～！何かいい仕事ないかなあ～」

「日本は人が多いよ～。今住んでる駅は毎朝人だらけになるんだ！こんなに人が多いのはイタリアでは見たことなかった～。驚いたあ～！」

青年の明るなおしゃべりを聞き、中年男性を合わせた3人で時に和やかに笑いあいながら下山していった。この中年男性も友達ではなく、さっき出会ったらしい。青年は登山時は1人でも、下山時は2人の日本人と楽しくおしゃべりをしている。言葉を気にしないで話続けた青年は、陽気で明るく一緒に下る道が楽しかった。

帰国までの2か月で九州の登山までできたかな？

珍しいガイド本を持っていたアメリカ人青年

イタリア人青年に会った1か月後のこと…。
塔の岳から下山し始めて標高1400m辺りに差し掛かった時、登って来る外国人の青年がいた。（どこの国の人？）と思ったが、青年は1人だったので話しかけることに躊躇して、挨拶だけして通り過ぎようとした。

「こんにちは」青年は笑顔で挨拶してきたので「こんにちは」だけ答えた。「今日は天気が良くて気持ち良いですね。」さらに青年は素晴らしく発音の良い日本語を使い、とても感じの良い笑顔で言う。

「そうですね…。」思い切って聞いてみた。
「どこの国から来ましたか？」すれ違った青年は振り返って答えた。
「アメリカです。」
「この道はよく来ますか？」青年は「いえ、初めてです。」と答え、

「あなたは？この道初めてですか？」逆に質問してきた。自分が質問することばかり考えていたので、質問されるとは思っていなかった。

「あ、いえ、1週間に1度、毎週来て7年目です。」戸惑いながら答えた。

青年はこの答えに驚いてしまったようで、

「1週間に1度、毎週で、7年？へーすごいなあ！強いですね！尊敬します！」目を丸くしながら言うので、私は信じられない気持ちになった。

「尊敬」という言葉を初対面の男性から言われたことは初めてだった。青年は素直にそう思った様子で、その素直さが嬉しかった。

「これからどこの道に行くのですか？」と聞くと、丹沢山だった。

「どうしてこの登山道を知ったのですか？」前から聞いたかった質問をした。青年はリュックから分厚いガイド本を取り出して、

「これに載っていました。これは良い本で分かり易いです。この間会ったフランス人も持っていました。」見せてもらおうと、英文で日本の主要な山が北海道から九州まで載っていた。英文による日本の登山ガイド本を見るのは初めてで珍しかった。そのうち妙な事に気が付いた。本はほとんど英文なのに山の名前や登山道の表記は日本語の漢字だった。

(こんな妙な本見たことない…どうして全部英文じゃないのかな？)

青年が書いたであろうメモは、英語で書き込んである…。

「今年富士山に登りました。」青年が言う。

「えっ？富士山に登ったのですか？」

「ええ、でも友人が8合目で高山病になったから頂上まで登れなかった。今年また行きます。」

「私は日本人だけど富士山は5合目までしか行ったことないんです。」私は言った。

「杉を見に屋久島も行きました。」

「え？縄文杉見たんですか？あの山登って？」(日本人だって縄文杉見る人は少ない)青年は「そうそう。」と何度も頷いた。私は以前家族で屋久島に行き、縄文杉を見ようとしたが、折からの天候の悪さで登山道まで行く道が崩れてタクシーが通らないため、断念した経験がある。その時宿の主人は

「この時期(3月～4月)は雨が多く、登れない時のほうが多い」と言っていた。青年は夏にでも行ったのかな？

「九州に住んでいたの、阿蘇山やあの辺りの山にも登りました。」九州は母の故郷で私の生まれた場所！

「え?!九州？どこに住んでいたの？」驚いて敬語も飛んでしまった！

「福岡。」（同じ県じゃないか…）驚いて佇んでいる私に話を続けた。

「だからあの辺の山によく登りました。阿蘇山知っていますか？」頷きながら思った。
（阿蘇山！噴火から何年も経って行ったのに、まだ登山禁止だった。この人私が断念した山ばかり行っている…）

「もう5年日本にいます。あと5年はいる予定です。」さらに驚いた。

「え？そんなに？どうして？」（仕事の関係…？）

「日本が好きなんです。」

「どういうところが？」

「山が沢山あって、きれいなランドスケープ（周りを指し）、和食が好きだし、親切な人々…」そう言って日本人の私を指したので、思わず笑顔になった。日本に長くいて、目の前の相手を尊重しながら話すのが日本的。

（私も日本人は親切だと思うし和食大好き。）

「梅干しや納豆は？」

「納豆は大好きです。」（本当かなあ？）

「本当？和食好きっていう外人でも納豆苦手って聞くけど…。」

「本当！だって3パックの買って毎朝食べていたから。熱いご飯にのせると美味しい！」青年の嬉しそうな顔を見ていると、事実らしい。私は自分で納豆を作ったことがあるくらい、納豆大好物だったから、

「私も納豆好きで毎朝食べています。」

まだまだ話は面白そうだったが、秋で日暮れが早い。もう終わりにして下山しないと。青年は上で1泊する予定だった。

「私も何泊かして歩きたいんだけど、1人だと泊まりを躊躇してまだできない。」と言うと、

「あなたは強い人。尊敬します。健康ですね。それだけ歩けたら今後何でもできます。強いからどんな事でもできます。」最後にまた言った。

「…ありがとう。」心から嬉しかった。

青年は穏やかで落ち着いた日本人のようだった。発音が素晴らしく敬語が丁寧。きっと日本で良い人間関係を築いているのだと思う。人を心から褒められる人は、その人が幸せをたくさん感じている人…。

私たちは分かれてそれぞれに歩いて行った。

下りながらまたあのガイド本を思い出していた。

（どうしてあんな妙な本があるのかな？全体英文の中に山や登山道の表記だけ漢字だ

った。)色々と考えていたらハッと気が付いた。

今ほとんどの日本の田舎は日本語の標識しか出ていない。全部英語だと漢字を読めない外国人が登山道を探すのは至難の業。交通手段や道順を英語で表記し、登山道や山の名前だけ日本語の漢字にしておけば、見比べて分かり易い…。そうなることさらに感心してしまった。誰が製作・監修したのか知らないけど、日本に来て実際に歩いた外国人が、後から来る人たちが困らないように制作したらしい…。

(素晴らしい…！)

こういうガイド本が存在している事を今まで知らなかったから、知ることができて嬉しかった。青年と会話ができたことも、心温まるとても嬉しい出来事だった。

フィンランドの森で・私が外国人

ここでの外国人は私。

これはフィンランドに行った時の事、私は友人の家に滞在していた。

その日は友人が仕事に行くというので、どう過ごすか聞かれた。私はかねてからの希望だった、1人で森をハイキングしたいと言った。

「本気？」と尋ねるので、頷いた。私が日本で1人登山をしているのを知っていたので、特に反対はされなかった。

友人が仕事に出かけたあと、コンパスと地図と水・サンドイッチを持参して、雨上がりの森に出発した。地理的に心配はなかったが、1番の心配はバツリと男性に会うこと。日本でも最も心配なのは同じだけど、選んだ厳し登山道では安易に人は来れない。でもここはほとんど平地で、車で来た人たちが森にいることがある。英語が話せればまだよいが、フィンランド語でからまれても困る。日本の標高1000m以上とは世界が違ふ。

それでも、雨上がりの森はフィトンチッドが大量に出ていて、その誘惑を無視することはできなかった。

森の中はうっそうとした湿気に包まれていたが、太陽が照りすべてを美しく輝かせていた。森の中の小さな川は雨で氾濫して周りが沼のようになっていたが、木漏れ日に照らされて、まるで神聖な場所であるかのように輝やき、せせらぎの小さな音が心地よい。様々な植物の香りがして、そこに立っていると夢の中にいるような不思議な感覚に包まれた。

私はすぐにこの”フィンランドの森・1人歩き”に夢中になっていた…。

少し行くと車が置いてあるのが見え、緊張して速足で通り過ぎた…。

(誰にも会いませんように…) 車の側では誰にも会わなかった。安心してしばらく行くと、左側の森で人の足音がした。(!!)

(近づいてくる…どうしよう…無視するのは感じ悪いだろうなあ。何語で挨拶しよう？フィンランド語がいいかな？でもフィンランド語で返されても困るからやっぱり英語にしよう) 足音が近づいてくる…。

ひょっこり顔を出したのは小柄な中年男性だった…。相手も私の足音を聞き、人と会うことが分かっていたらしい。

「ハロー！」努めて明るく挨拶した。

「*Jo!Jo!oxoxoxoxoxox*」言っている事が分からない。緊張が増す…。

男性はペラペラと原語を話しては手持ちのバケツを見せてくる。中には立派なキノコが沢山入っていた。キノコ狩りに夢中になっているらしい。

(こういう人は安心!) 急にリラックスしてきた。

「なんて立派なキノコ!あなたが採ったの?」一応英語で言ってみたが、男性はフィンランド語で話続ける。雰囲気でだんだん分かってきた。

「雨上がりにキノコ狩りは最適なんだ!このエリアはまだ誰も来ていないからいいのが採れたんだぞ~!こんなに採れるなんて嬉しい~よ♪」1つ1つキノコを指して名前とどうやって料理するか話しているらしいことが伝わってくる。そのうち私に何か質問した。どうやら、

「あなたもキノコ狩りに来たのか?どれくらい採れた?」と聞いているらしいが正確には分からない。

(困ったな…きちんと説明しなきゃ…) 私は覚えているフィンランド語で言った。

「私は日本人です。フィンランド語はまだそんなに話せません。」男はまじまじと私の顔を見て感じよく手を顔の前で振って何か言う。

「そんなのいいんだよ。」と言う感じ。

「フィンランド語は難しい。」と言うと、男性は原語で

「ああ、そうだろう、特に外人にはね。」と言っているように、頷きながら私を軽くさした。私の知っている言葉は少しだけどなんとか乗り切っている様子。これで私はすっかり気が軽くなり、しばらく一緒にキノコ探しをしようと思った。

相手は日本語も英語も分からず、私はフィンランド語が分からない。

(相手はフィンランド語しか話さないのだから、私も日本語でいいよね♪) ここでは男性と同じように、思いっきり自国の言葉で話そうと決めた。

キノコを見つけて、

「あー！ここにあるよー！」と日本語で言うとちゃんと見に来る。

原語で常時話しながら、キノコをナイフで切り半分に割る。そして中を見て説明。

「ここの中の色が茶色すぎるんだ。これは食べごろを過ぎているよ。」捨てた。バケツの中の同種で中が白いキノコを指して、熱心に説明してくる。

「このキノコはこんな風に中が白じゃないと美味しくないんだよ。」と言っているらしい。

「ヘー、ここが白くないといけないのかあ。」日本語で頷くと、男性も頷いた。相手はフィンランド語だけ話し、私は日本語だけで話しているのに、かみ合ってお互い納得しているのだから、実にユニークな体験!!

こうして奇妙な会話が成立していた…。

私が見つけたキノコは小さすぎたり、半分に割ると中が茶色になっているものだった。

(う～ん、なかなか難しいね!) これ以上探しても良いキノコは見つけれそうにないと思った。

(そろそろハイキングの続きをしたいし…)

「色々ありがとう! ハイキングに行くからもう行くよ! 良いキノコ見つけてね!」手を振ったら、男性は何か言いながら頷いて同じように手を振った。久しぶりに思いっきり日本語で大声出して、ちゃんと通じて清々しかった。

これは実にユニークな体験で、1人で歩きながら思い出しては楽しい気分になった。言葉はコミュニケーションで占める割合はかなり少ないのかも。相手の動作や雰囲気、表情でずいぶん伝わってくるものだと実感した。

この男性はキノコ狩りに夢中で、同じ目的を持っているとほとんど話さなくても伝わるように感じた。

適当な場所でランチのサンドイッチを食べて帰宅途中、耳慣れない音がした。…遠くからこちらに来るその音は、馬が歩く音のようだった。

(人がいればいいけど…) 規則正しい感じの足音は人が乗っているようだ。

(こんな所にいきなり乗馬の人が現れるのかな?) 足音が近くなり、本当に乗馬した人が現れた。大きな馬は近くで見ると少し怖い感じ…。緊張したが、私に気付いたその人

は笑顔で馬と通り過ぎていった。

ここでは日常らしいこの光景は、日本ではあまり見ない。

…フィンランドの森ハイキングを充分楽しみ友人宅に帰った。

友人が帰宅したのでその日のハイキングの話をした。

「まさか、本当に2時間半も1人で森を歩くとは…！」と絶句し、

「フィンランド女性だって1人では歩かない。その男が変な奴じゃなくて良かった…。

時々森にはキチガイじみたのがいるから！こんな話は初めて聞いた。2時間半も1人で歩くなんで…」驚きと安堵の表情で何度も言っていた。友人は反対はしなかったが、本当に行くとは思っていなかったらしい…。

「私を信じてOKと言ってくれたから、良かった。ありがとう。」と言うと、

「いつだって信じているよ！」と言った。

フィンランドの森1人歩きも充分に楽しめて、自分を信じて歩いて良かった！また少し、心が豊かになったように感じた。

あとがき

お読み頂き、ありがとうございました。

この登山道は現在では状況が少し変わって、文中の山小屋は跡地になり、命の危機を感じる場所・痩せ尾根は、ガツシリとした手すりを取り付けられ、安全に歩けるようになっています。

あの痩せ尾根では強風の時はいつも、
(命を大事にしなければ...)と、思っていました。

"他の誰でもない、自分自身でいられる幸せ"に、心一杯満たされるこの登山は、体力的にはハードだったと思います。人生の半ばを過ぎたあたりで、ここまでの登山をしなくても、このような気持ちに満たされることがあり、今では近くの川沿いのウォーキングを楽しんでいます。

山ガールという言葉が流行りだしてから、移住先の山にも若い女性の1人登山の方々が来るようになりました。感性豊かな時期に豊かな自然を1人でゆっくり楽しむのは素晴らしいことです。

丹沢も今では女性も増えたことでしょう。

自然に親しむと、この地球がたくさんの他の生き物も共に生きている、人間だけのものではないことを実感します。これからも他の生き物を意識して自然に親しもうと思えます。

ありがとうございました。

